



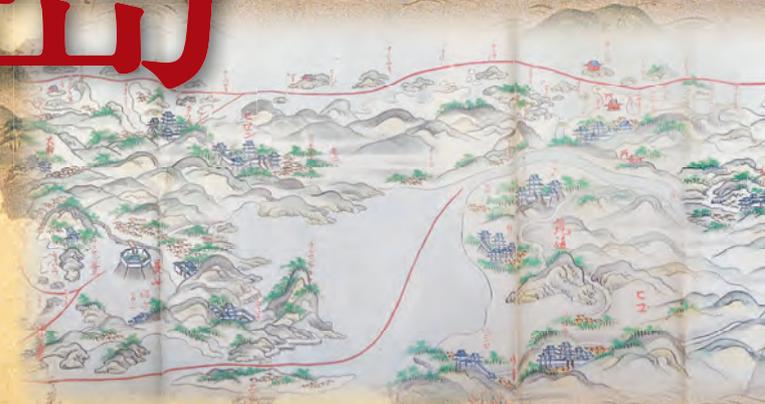
日本財団 助成事業  
The Nippon Foundation  
船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

大学博物館共同企画シリーズⅡ

# 閉ざされた島

# 開かれた海

— 鎖国のなかの日本 —





大学博物館共同企画シリーズⅡ

# 閉ざされた島 開かれた海

— 鎖国のなかの日本 —



西南学院大学博物館  
西南学院大学

## ごあいさつ

本学博物館では「社会への開かれた大学」を具現化する取り組みとして、毎年2回の特別展を開催しております。開館して6年目ということもあり、学院関係者のもとより、地域住民の方々、さらには遠方からも足を運んでくださる来館者も増えてきております。ひとえに調査研究の成果を社会還元する機関として、本学博物館の継続した活動が浸透してきているように感じております。

大学博物館を有する大学は、今日でも決して多いとはいえません。そんななか、特色ある大学のひとつとして、本学博物館が担う役割は大きくなってきております。前年度は玉川大学教育博物館と共同企画した展覧会、「イコンー東西聖像画の世界」を開催することができました。大学の垣根を越えて実施した展覧会は、新たな大学博物館の試みとして、各方面からも注目されるものとなりました。

今回の特別展は、兵庫県神戸市にあります、神戸大学海事博物館との共同企画となります。本学がこれまで収集してきた資料と、そこに神戸大学海事博物館が所蔵される資料を加えた「“海”と“船”からみた日本」を共通テーマとした展覧会となりました。大学博物館が所蔵する学術的にも貴重な資料を公開し、我々の活動の一端を発信できればと考えております。また、普段はなかなか目にすることができない、大学の“秘宝”をご覧いただく機会になればと考えております。

なお、本展覧会は11月2日(金)から12月5日(水)まで、神戸大学海事博物館でも実施いたします。本学博物館の新しい取り組みもあわせてご理解いただければ幸いです。

最後となりましたが、ご協力いただきました神戸大学海事博物館館長をはじめ、スタッフの皆様、本事業に支援いただいた船の科学館・海と船の博物館ネットワーク関係各位に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2012(平成24)年6月2日

西南学院大学博物館

館長 高倉 洋彰

## 大学博物館共同企画の開催にあたって

西南学院大学博物館の主催による大学博物館共同企画シリーズⅡ「閉ざされた島 開かれた海—鎖国のなかの日本」の開催をお慶び申し上げますとともに、海事博物館(神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館)として、はじめて共催させていただけますこととお礼申し上げます。また、船の科学館・海と船の博物館ネットワーク(財団法人日本海事科学振興財団)には、常日頃の支援提供と共に本企画の実施にあたりご協力を賜り感謝いたします。

神戸大学は2003年10月の(前)神戸大学と(旧)神戸商船大学の統合により、国際都市として発展してきた港町神戸にふさわしい「海に開かれた国際性豊かな総合大学」を基本理念に、世界トップクラスの教育研究と卓越した社会貢献の実現を目指しています。また、神戸大学大学院海事科学研究科は西南学院大学より遅れること1年、1917年に設立された川崎商船学校を起源とし、2017年には創基100周年を迎えます。この95年間、官立への移管、戦時中の統合、戦後の議員立法による新制大学(神戸商船大学)誕生、神戸大学との統合、大学院重点化等、時代とともに幾多の変遷を経ましたが、海事教育の責務を一貫して担い、世界を舞台に活躍する優秀な船舶職員(船長、航海士、機関長、機関士)を輩出し、海国日本の基盤を支え続けています。海事博物館は海技教育の充実を目的に海事関係資料を集めて開館した海事参考館に端を発し、その後、広く社会に海事を啓発するための海事資料館を経て海事博物館へと発展的改称を重ねて現在に至っています(詳しくは海事博物館副館長野村の執筆による本文記事を参照下さい)。

海事博物館の活動および運営は、博物館専門員を兼任する教員だけでは成り立たず、特別専門員として位置づけられるボランティアスタッフ(主に神戸商船大学卒業生)の、母校あるいは姉妹校および後輩のために役立ちたいという善意と熱意により支えられています。また、海事博物館と日本船舶海洋工学会関西支部造船資料保存委員会との連携による造船関連資料保存活動は、造船界の最前線で活躍した方々による海と船を愛する無償の奉仕活動により支えられています。

このように大勢の皆様のお力添えと海と船の企画展の支援を受けながら、海事博物館では2008年度から5年連続で企画展を開催することができました。2012年度は「船の推力発展史 一人力・風力から未来へ」と題して、7月13日から10月27日の間に開催を予定し、また、同テーマによる海事博物館市民セミナーを10月、11月の週末に5回にわたって開講する準備を進めています。さらに、初の試みですが、11月2日から12月5日の間は、西南学院大学博物館と神戸大学海事博物館の大学博物館共同企画展示を海事博物館で予定しています。

“海”と“船”に関してなじみの深い神戸大学深江キャンパスにあり、「海と船の過去、今、夢ある未来が詰まった博物館」を自負する神戸大学海事博物館にも是非足をお運びいただき、企画展示や常設展示資料から往事を回顧いただきお楽しみいただけますよう御願いたします。

このような素晴らしい機会をご提供いただきました西南学院大学博物館館長はじめスタッフの皆様ならびに船の科学館・海と船の博物館ネットワークの皆様にご心より感謝申し上げます。

2012(平成24)年6月2日

神戸大学海事博物館

館長 内田 誠

## 開催概要

神戸大学と西南学院大学には共通して大学博物館があります。今日、大学博物館のあり方は、社会に開かれた機関として、研究成果を社会還元することが求められております。これまで各大学博物館では特別展・企画展が開催されているとともに関連する公開講座などがおこなわれ、一定の成果があげられています。

こうした現状から次の段階へ進む取り組みとして、大学間交流における共同企画事業が必要です。西南学院大学では2011年度秋季に玉川大学教育博物館と共同主催として大学博物館共同企画シリーズⅠ「イコン—東西聖像画の世界—」を開催いたしました。両大学が共通して所蔵するイコンを国・時代のジャンルごとに展示し、来館者により質の高い展覧会を提供しました。また、講演会も実施し、両大学博物館の取り組み、研究成果を紹介する機会となりました。

本展覧会はこれを踏まえて、神戸大学海事博物館と西南学院大学博物館の両博物館において、相互の収蔵品を展示することで、両大学への理解、ならびにこれまでの研究成果を還元する機会になればと考えています。これまでの大学博物館単体での取り組みから枠を超えて、大学博物館共同で特別展を展開する事業を実施していくことが、新しい地域貢献、研究成果の還元につながるものと考えています。

そこで両大学博物館で共通する「“海”と“船”からみた日本」をテーマに設定し、大学博物館所蔵資料を相互に展示し、特別展を開催いたします。選りすぐりの貴重な資料から新たな情報を発信しています。なお、本展覧会は、PartⅡとして神戸大学海事博物館を会場にしてもおこなわれます。大学間交流の一指標としても今後シリーズ化して、事業展開していきます。

# 目 次

## ごあいさつ

|                    |   |
|--------------------|---|
| 西南学院大学博物館 館長 高倉 洋彰 | 2 |
| 神戸大学海事博物館 館長 内田 誠  | 3 |

|       |   |
|-------|---|
| 開催概要  | 4 |
| 目次・凡例 | 5 |

## 本編

|                     |    |
|---------------------|----|
| I. 近世日本の新時代         | 6  |
| II. 閉ざされた日本と航海技術の進展 | 16 |
| III. 想いを込めた絵馬       | 28 |
| IV. 開かれた海－鎖国の終焉     | 32 |

## 寄稿 神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館の取り組み

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 神戸大学大学院海事科学研究科准教授 野村 昌孝 | 41 |
|-------------------------|----|

## 鎖国のなかの近世日本

|                     |    |
|---------------------|----|
| 西南学院大学博物館 学芸員 安高 啓明 | 45 |
|---------------------|----|

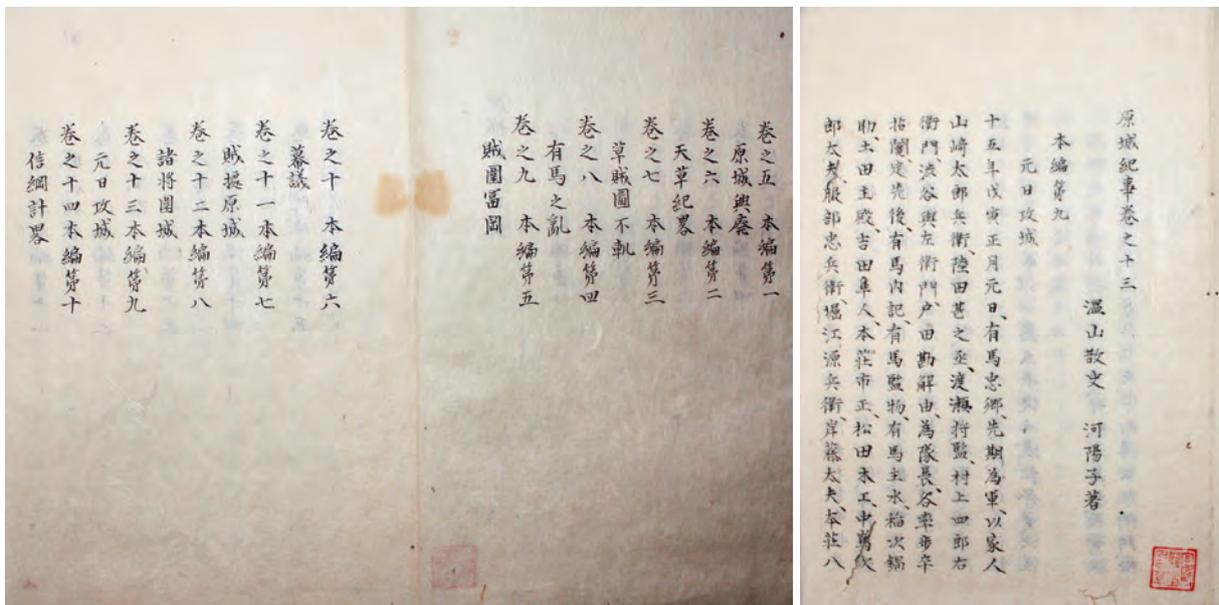
|      |    |
|------|----|
| 出品目録 | 50 |
|------|----|

## 凡例

- ◎本図録は西南学院大学博物館秋季特別展、大学博物館共同企画シリーズⅡ「閉ざされた島 開かれた海－鎖国のなかの日本」〔会期：本学会場：2012(平成24)年6月2日(土)から8月4日(土)まで、神戸大学会場：11月2日(金)から12月5日(水)〕開催にあたり、作成したものである。
- ◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。
- ◎本図録の資料解説および編集は、安高啓明(本学博物館学芸員)がおこなった。
- ◎翻訳・編集補助には貞清世里(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、高橋幸作(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、平川知佳(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、中尾祐太(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、阿比留由佳(本学大学院国際文化研究科研究生)、稲益あゆみ(本学大学院国際文化研究科博士前期課程)、吉松由希(本学大学院国際文化研究科博士前期課程)があたった。なお、英訳については本学大学院を修了した中松沙織氏にもご協力を得た。

# I. 近世日本の新時代

島原・天草一揆の終結がもたらしたのは“新時代”の幕開けだった。寛永鎖国令の発布により南蛮文化の彩りあふれた時代から一変し、キリスト教が厳禁となる。さらに、日本に来航できる国もオランダ・中国とに限られたことで、日本は独自の文化を創出していくことになる。また、紅毛文化という新しい刺激は、多くの人に受容されていった。こうした時代に適応しつつ、海に囲まれた日本は、自立したなかに独特な文化を築いていった。

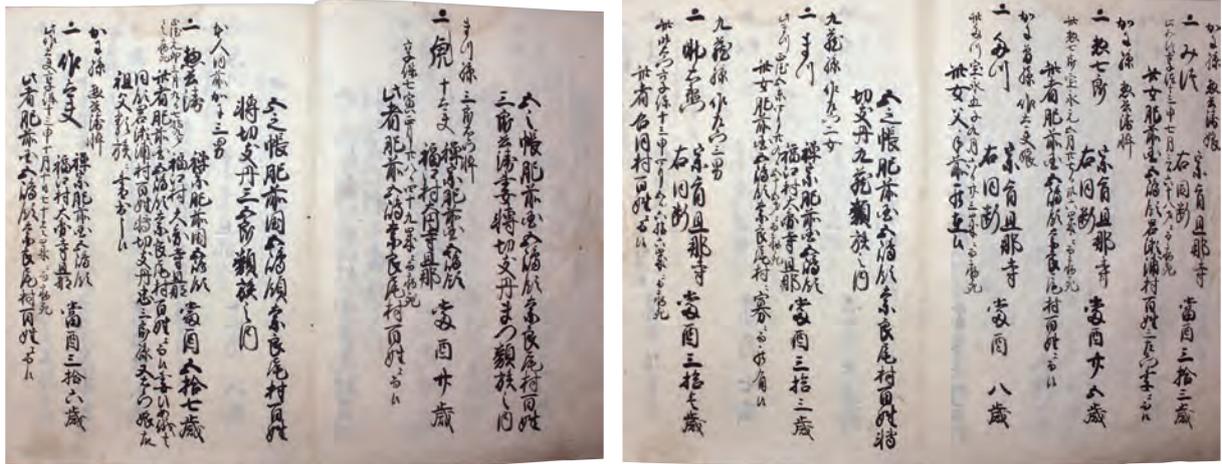


## 1. 原城紀事

1846(弘化3)年  
西南学院大学博物館

1637(寛永14)年に起こった島原・天草一揆は、幕府がキリスト教の信仰を厳禁とする一大事件だった。原城に籠城した一揆軍を主導したのは益田四郎時貞(天草四郎)で、彼のカリスマ性のもとで一揆勢はキリスト教を掲げどころとして結集した。結局、幕府軍により鎮圧されたものの、キリシタンによる“大乱”として後世にも語り継がれるところとなった。これには一揆側のものほとんどなく、体制側による記録類が多い。この資料も体制側のものになり、1846(弘化3)年に河北温山が記したものである。戦乱の様子に詳しく、幕府軍や一揆軍の軍勢や兵数、さらには原城落城後の戦後処理(寺沢始末・松倉始末・高力始末)などを含めて記されている。なお、本掲載箇所本編第九には元日の原城の攻防が記されている。

### Records of Shimabara-Amakusa Rebellion



## 2. 肥前國五嶋転切支丹之類族存命帳

1776(安永6)年  
西南学院大学博物館

本資料は五島藩でおこなった転びキリシタンの調書である。五島に多くのキリシタンがいたことは知られるが、その事実を知っていた五島藩は、以前キリシタンでありながら転宗したものの悉皆調査を行なっている。この調査は転びキリシタン本人からさかのぼり、その子孫や類族にも及んでいる。五島は公儀流島(幕領から流罪人を送る島)のひとつで、このなかには潜伏キリシタンも含まれていた。こうした状況は秘密裏に知られており、五島藩では長崎奉行所から踏絵を借りて毎年、絵踏している。転宗したあとも、その子孫たちは監視されていたことがこの資料からわかる。

List of surviving Christians of the Goto Clan in Nagasaki

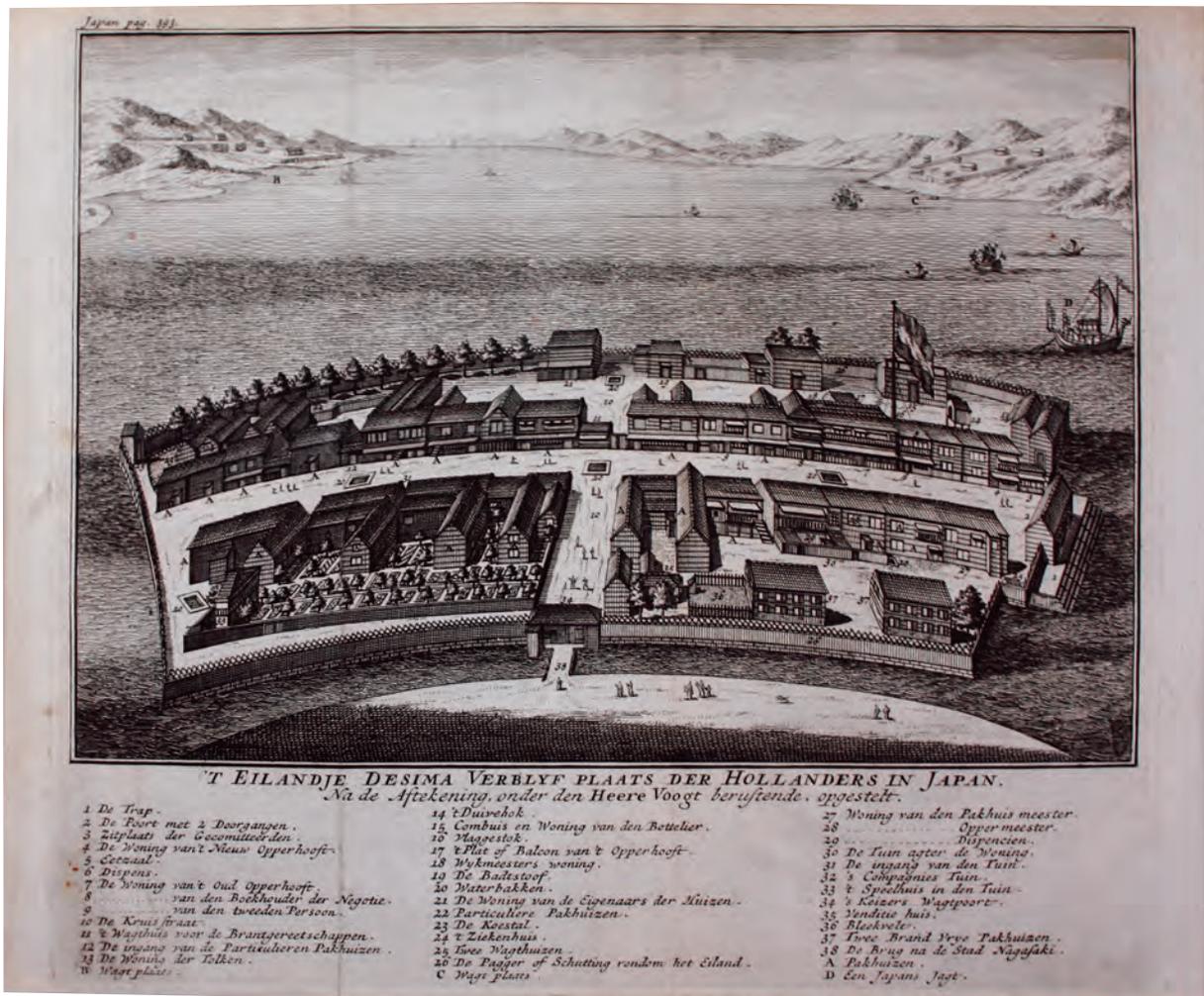
## 3. 宗門改影踏帳

西南学院大学博物館

島原藩の宗門改人別帳で、特に武家を中心に記されている。所属する寺院が記され、その下に名前と印がおされるのは、各地の宗門人別改帳と共通する。男子は氏名の押印(黒印)であるが、妻・女性は筆の持ち手を利用した○印がおされている。江戸時代、九州各地では人別改にあわせて宗門改も同時に行なわれていた。宗門改のときにおこなわれていたのが絵踏であり、島原藩は長崎奉行所から踏絵を借用して、絵踏をおこなっていた。本資料の表紙には「宗門改影踏帳」と記されているが、これは島原藩が絵踏のことを「影踏」と称していたことに起因する。幕領(長崎奉行所)では絵踏と称していたが、仙台伊達家では「ご影を踏む」、熊本細川家では「ミ影を踏む」、肥後八代松井家では「外道踏み」などといわれた。

Documents with the name of apostates





#### 4. 出島図

1735年頃  
西南学院大学博物館

禁教下において、オランダ人は出島での生活を余儀なくされる。そもそも出島は1636(寛永13)年に市中を流れる中島川下流に、豪商25人が出資して、扇面形に整えて家宅を建て、ポルトガル人を収容したところである。1639(寛永16)年にポルトガル人が追放になると、1641(寛永18)年に平戸からオランダ商館を移転して、以降、オランダ人はここで生活することになった。3969坪余りの島には、橋のたもとに制札が掲げられ門鑑をもった商人や人夫、遊女以外の出入りを禁じ、オランダ人も許可を得たうえで役人護衛により外出するほかなかった。鎖国期におけるわが国唯一の西洋との接点は出島であった。本資料はティリオンが刊行した地図のひとつで、1735(享保20)年頃の出島を描いたものである。

Map of Dejima

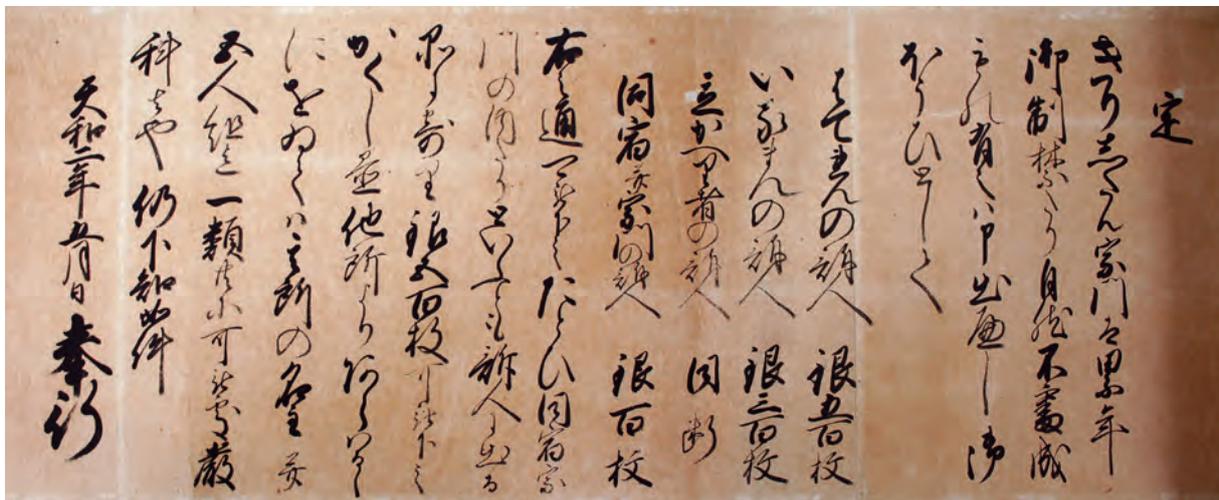


## 5. キリシタン制札

1682(天和2)年  
西南学院大学博物館

高札の掲示の起源は奈良時代末期にさかのぼり、室町時代の徳政・撰銭・喧嘩口論などの札は江戸時代の高札にも継承された。江戸時代社会は高札全盛期といえ、識字率を反映した文字による人民支配であった。この資料はそのひとつキリシタン訴人褒賞を掲げた高札で、訴人の対象が伴天連(司祭)であれば銀500枚、いるまん(修道士)であれば銀300枚、立ち帰り(キリスト教に復宗)の者であれば銀300枚、同宿(伝道補助)であれば銀100枚を与えるとある。キリスト教の信仰が禁止されたことにともない、これを禁じる制札が掲げられたのである。長崎では囑託銀といって、実際に褒賞となる銀を置いていた。

Proclamation banning Christianity



## 6. 高札写

1682(天和2)年頃  
西南学院大学博物館

本資料は1682(天和2)年に掲げられていた高札の写しである。写真掲載箇所はキリシタン制札の写であるが、これ以外に、毒薬や似薬種の売買を禁じたもの、似金銀を禁じたものの触を収めている。また、浦高札といって風波にのまれて海難救助が必要となったときの対応、抜荷を禁じるものも収めている(一部断簡)。天和年間徳川綱吉の時代であるが、この頃、将軍の代替わりにもなう改元の時に、高札を新調するようになった。江戸時代の高札は親子忠孝札・キリシタン札・毒薬札・駄賃札・火付札が五大制札といわれ、各地に掲げられた。本資料のように、高札は各所で写され、なかには寺子屋の教科書としても利用されることもあった。

Transcription of an official bulletin board with the law prohibiting Christianity



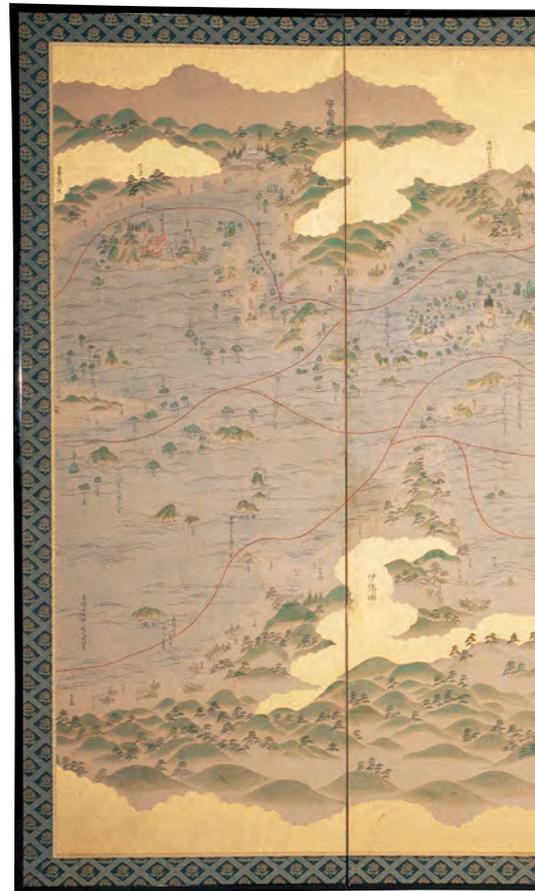
長崎部分

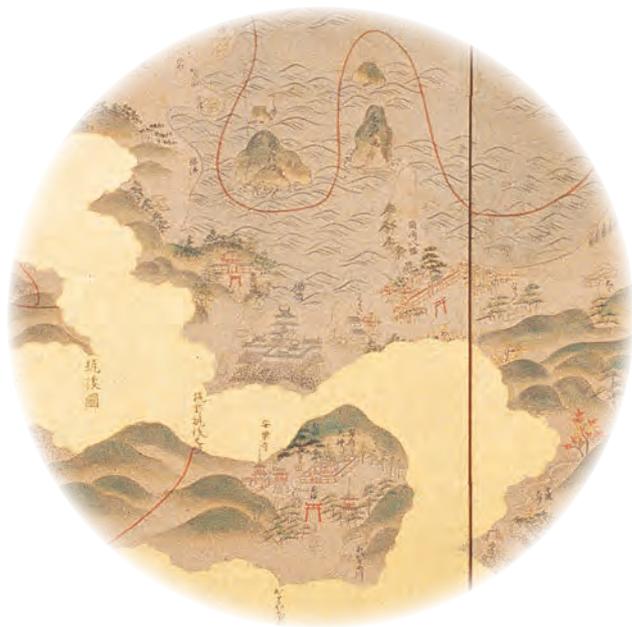
## 7. 海路図屏風

神戸大学海事博物館

大坂から長崎までの航路を描いたもので、元禄頃の西日本一帯の様子をあらわした六曲一双である。左隻には九州北部(長崎・佐賀・福岡・大分・宮崎)が描かれ、特に長崎の描写が詳しい。その構図からも長崎に居住していたか、長崎の地理に精通していたものによる描かれ方である。また、福岡城や小倉城、久留米城、柳川城、秋月城、佐賀城、唐津城、大村城、島原城、熊本城、八代城、富岡城、木付城、日出城、府内城があるなど、主要な城郭をおさえていることも特徴といえる。右隻には瀬戸内海の細かな島々が配されていることなどから、航路図のなかでも本資料は精度の高いものといえる。

Map of sea route from Osaka to Nagasaki





福岡部分





## 8. 自大坂至長崎之図

1811(文化8)年  
神戸大学海事博物館

大坂から長崎までの海路図で、冒頭には「大坂<sub>三</sub>里<sub>二</sub>西宮<sub>三</sub>〜福田<sub>三</sub>里<sub>二</sub>長崎」といったように各中継地点の距離が記されている。大坂には大坂城や天王寺、「ナンバ村」(難波)が描かれ、以降、主要な地名と町並みをおさめている。瀬戸内海に浮かぶ島々も淡路島をはじめ、小豆島など点在している様子を島名入りで描いている。宮島・屋代島を経由して日出・中津を通り、小倉を経て玄海から平戸経由で長崎へ到達している。各領の境界線には朱書きで線引きされており、あわせて航路上で主要な城郭もおとされている。



Map of sea route from Osaka to Nagasaki



## 9. 大坂より豊前小倉まで之海路図

18世紀後半  
神戸大学海事博物館

大坂から小倉までの海路を描いたもの。大坂を起点に淡路島から瀬戸内海の島々、日出、中津、長府、小倉へと続いている。これらの地点には城郭が描かれており、一般的な海路図と同類型といえる。航海で用いたというよりは、記録的な要素が強い資料といえる。この資料の特徴は、各地領主名と石高が記されていることである。例えば、和歌山城は「紀伊中納言五十五万五千石」とあり、岡山城は「松平上総介候三十一万五二百石」、小倉城は「小笠原十五万石」とある。筆者はなんらかの地誌をひもとき、これを作成したと思われる、18世紀後半頃の地勢的要因を含めて記されている。

Map of sea route from Osaka to Kokura

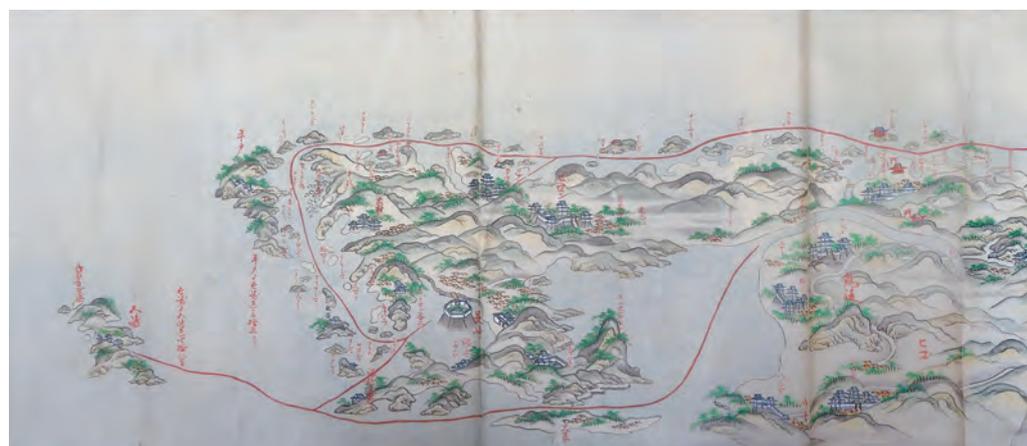
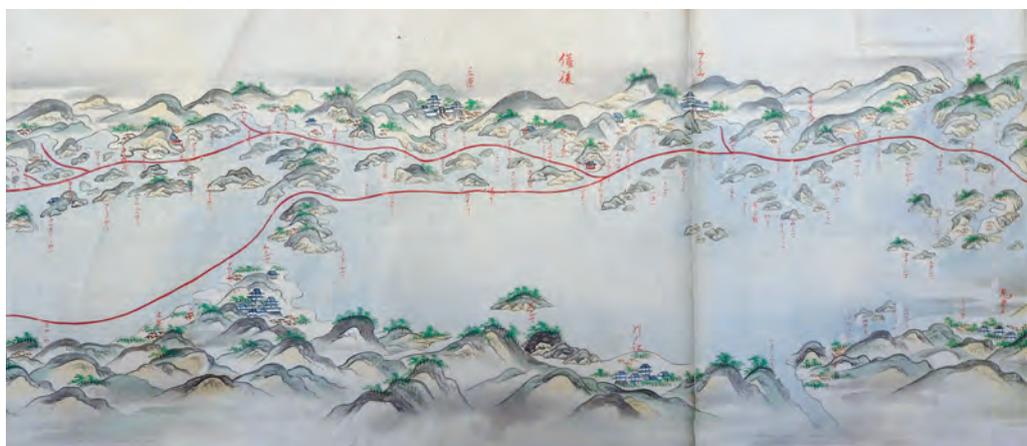


## 10. 江戸長崎海陸図

神戸大学海事博物館

武蔵・江戸から摂津・大坂までは陸路をとっており、大坂から肥前・長崎へは海路をとっている。そのため相模から伊豆の間には箱根の陣屋や小田原が描かれ、さらに富士山や浅間山などもある。途中、茶屋もあるのは、休憩に利用していたためか。大坂から長崎までは朱線で航路が記されており、淡路島や宮島などの主要地、中津城や長府城をはじめとする城郭も描かれている。この朱線は長崎・五島まで続いている。全体的に詳しい描写で、絵画的にもよくかけている資料であるが、出島(扇面形)が六角形で描かれているなど、不明瞭な点もある。旅記録として作成されたものと考えられる。

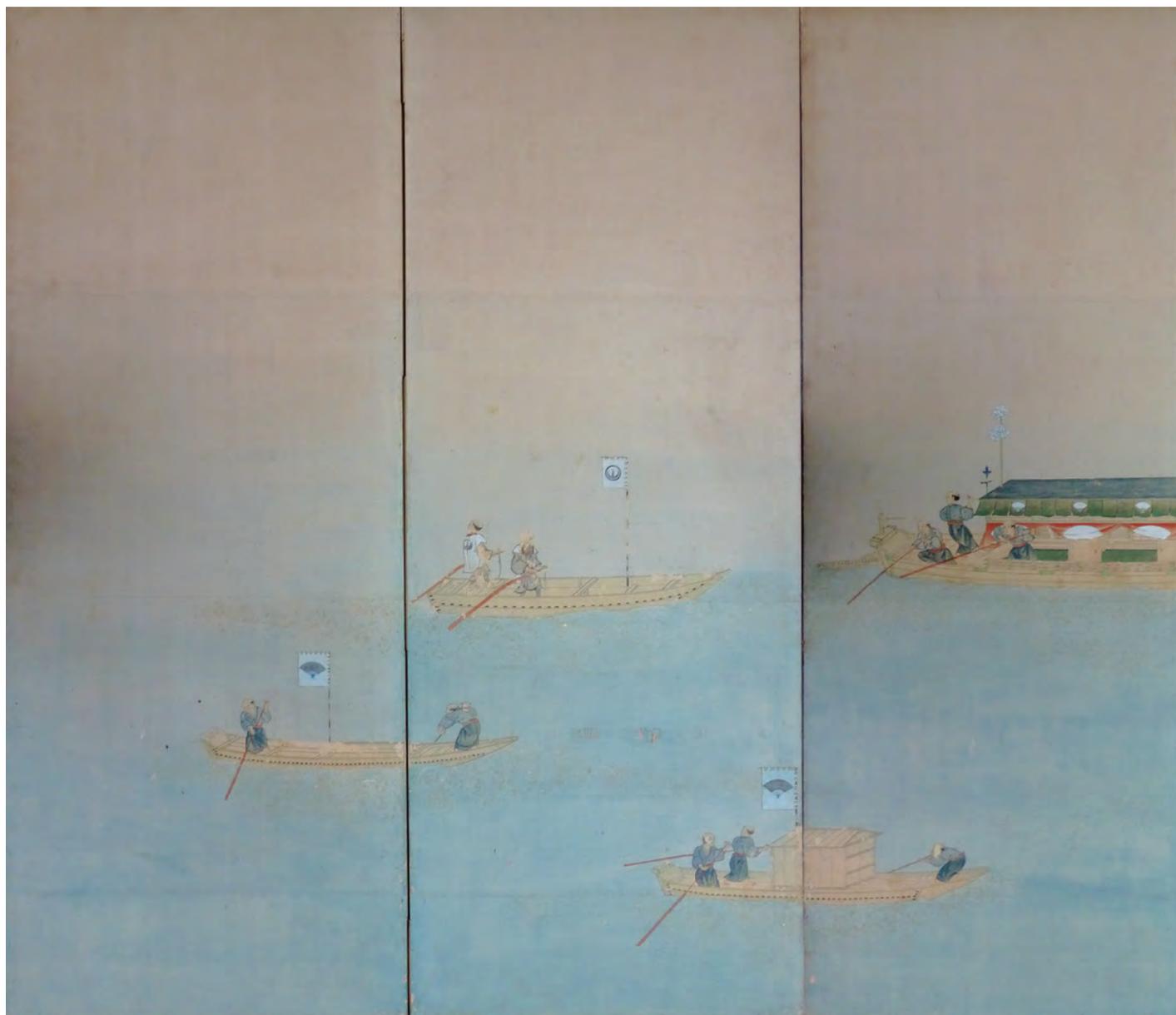
Map of land and sea route from Osaka to Nagasaki





## Ⅱ. 閉ざされた日本と航海技術の進展

寛永鎖国令の確立により、オランダ人と中国人のみが日本滞在を許される。長崎には出島と唐人屋敷が設けられ、彼らはここで生活することになる。日本は舶来品や海外の情報を彼らを通じて入手するほかなかった。他方、国内では海路充実にともなって、航海技術が進展する。船上での快適さやお洒落を追求したのもつくれるなど、生命を落としかねない危険な航海中にどのように過ごすのか、趣向をこらしていった。

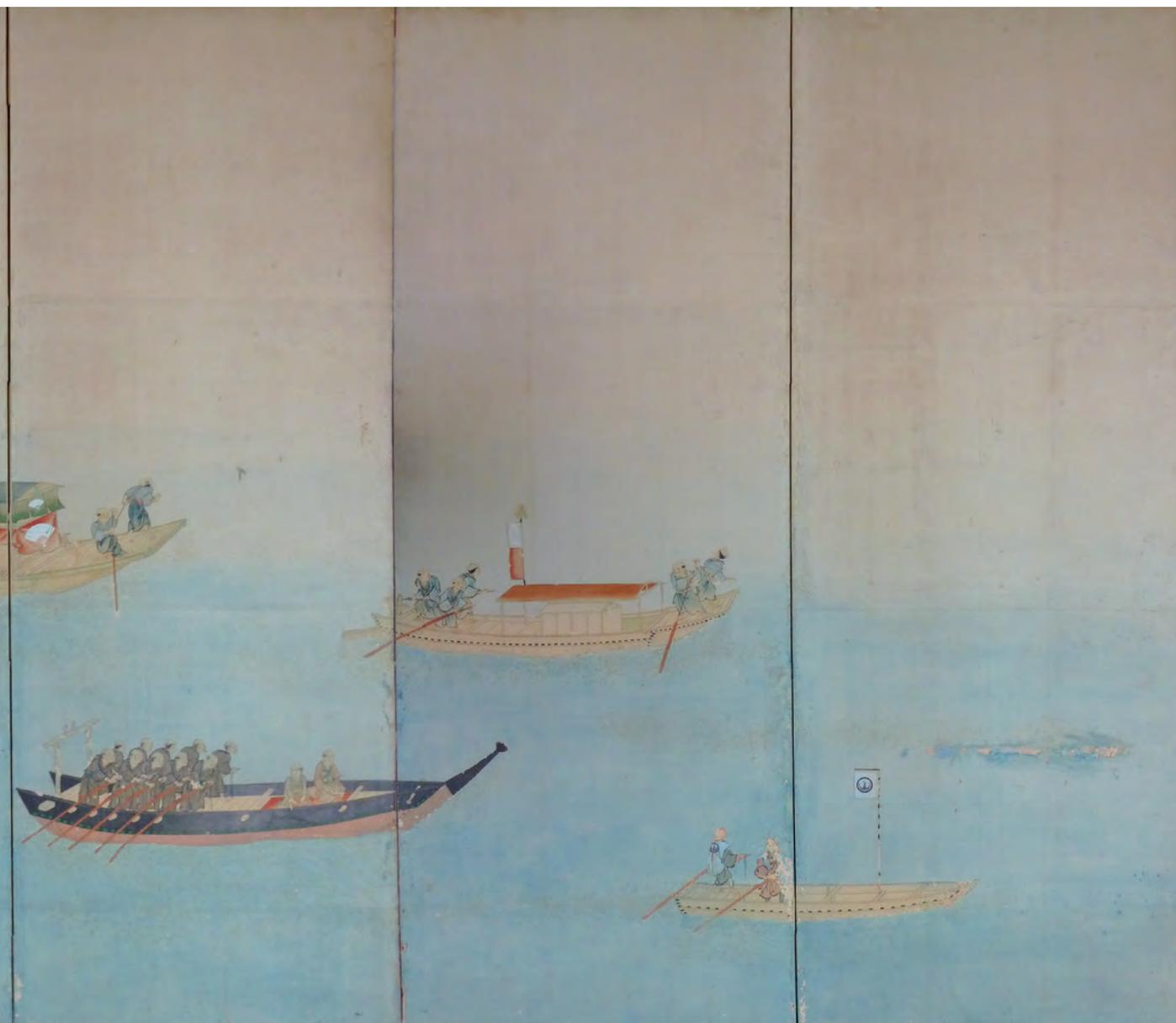


## 11. 御迎御座船屏風

江戸時代中期  
神戸大学海事博物館

貴人が乗る船を御座船と総称するが、そもそもは藩主の乗る船を御座船といい、将軍が乗る船が御召関船と呼んだ。大藩の御座船のなかには豪華を極めた華麗な仕様となっているものもあった。河川で使用する川御座船もあり、特に大坂には幕府をはじめ中国・西国筋の諸大名の川御座船がおかれていた。遊興や参勤交代のときばかりでなく、朝鮮通信使・琉球使節の来朝のときに迎接用としても用いられた。本資料は御座船本体は描かれておらず、その周りの船を描いたものと思われる。本来は本船を描いたものもあったはずであり、六曲一双の資料だったと思われる。

Welcoming boats for nobles





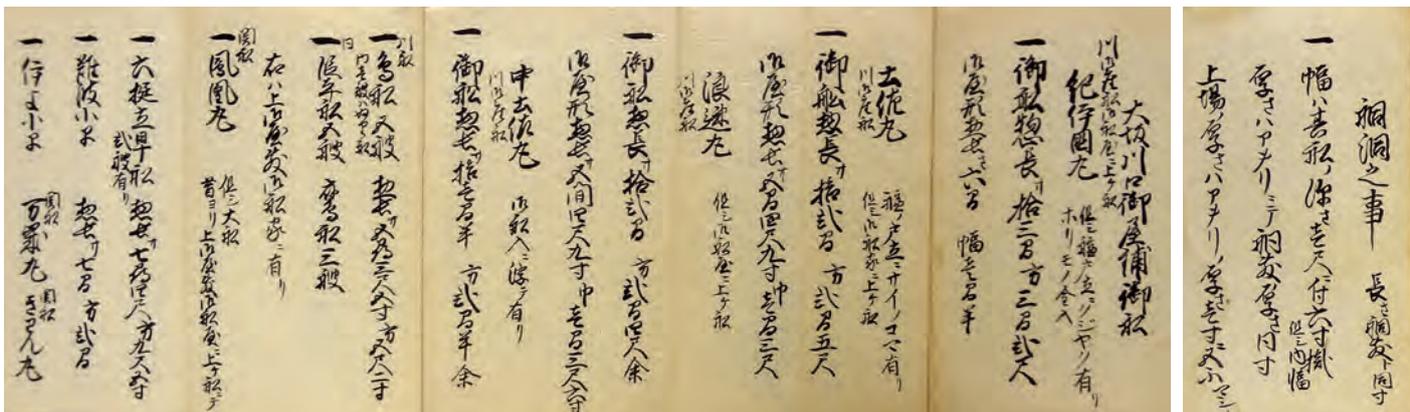
## 12. 朝鮮通信使川御座船絵巻

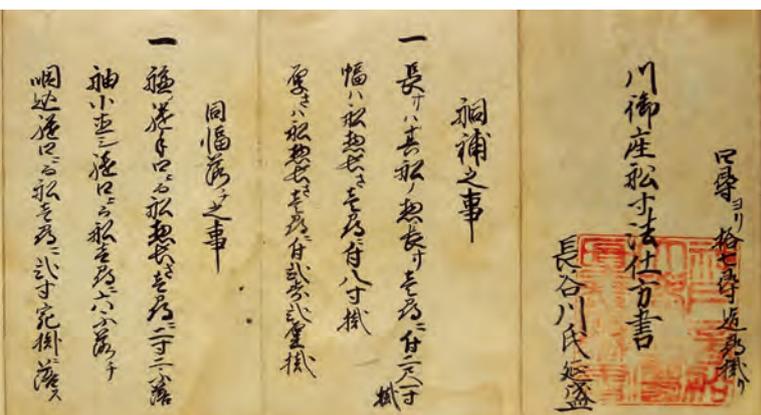
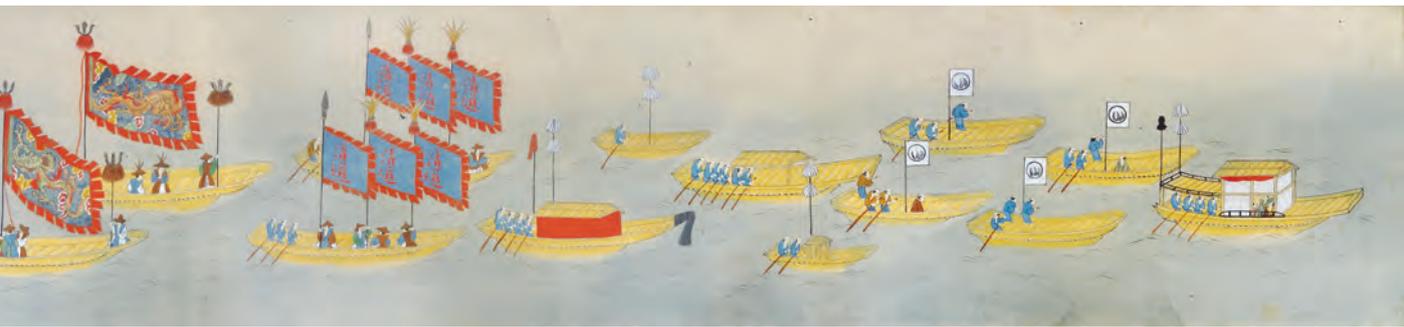
18世紀

神戸大学海事博物館

朝鮮通信使が来朝すると日本側からも船が用意される。各藩が所有した川御座船はそのひとつであり、迎接用としてしばしば用いられていた。朝鮮通信使は釜山から海路で対馬、馬関海峡、瀬戸内海を航行する。大坂に入ると川御座船に乗り換えて淀川をのぼり、淀からは陸路で江戸へ向かった。このときの川御座船は大坂に停泊していた各藩のものが提供され、本資料には豊後白杵藩稲葉家の御紋などがみられる。本資料は1711(正徳元)年の朝鮮通信使の来朝時の様子を描いたもので、徳川家宣の襲封祝賀を目的としたものだった。

Picture scroll of envoys from Korea's Joseon Dynasty arrive in Japan





### 13. 川御座船寸法仕方書

江戸時代中期  
神戸大学海事博物館

長さや厚さ幅など、その船のサイズに応じる数値を記している。また、各パーツや内装に至るまで詳しくある。巻末には「大坂川口御屋鋪御船」とあり、具体的な事例として紀伊国丸や土佐丸、浪速丸、中土佐丸、関船の鳳凰丸の規模が収められている。

Measurement documents of roofed pleasant riverboat

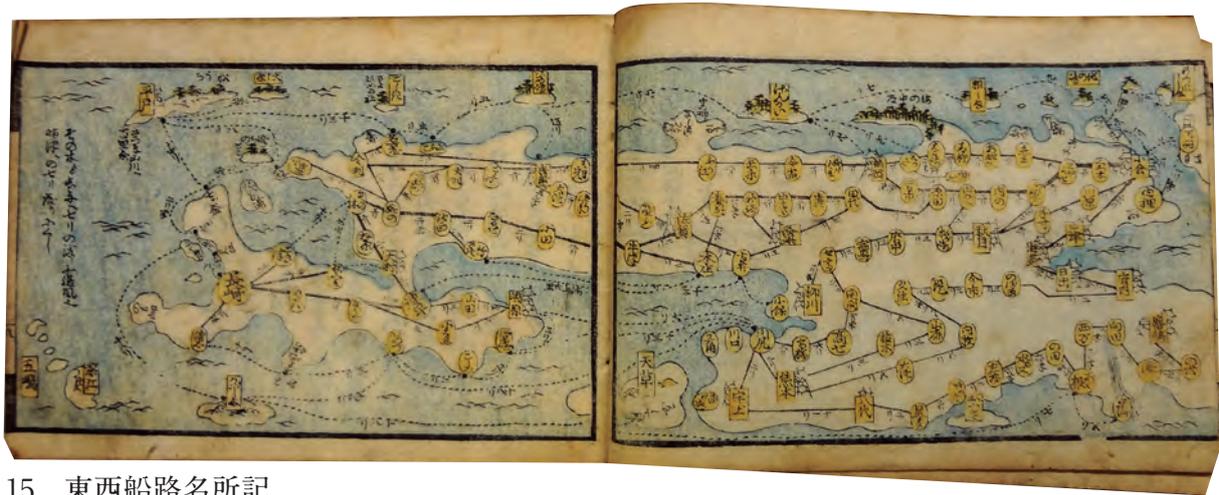


#### 14. 西国大名御船御座船図並武将花押切抜帖

神戸大学海事博物館

播州姫路から肥前大村侯の御座船62図と西国大名の花押87図を収める、本来は一紙だったと思われるが、断裁されて本帖に貼付されたものと考えられる。各藩の御座船の形状は基本的には同じようで、旗印に家紋が用いられていることなども共通する。当時の藩が所有する船は、石高によってその規模も制限されている。船が軍事活動に直結するために、幕府からお触れが出されていた。川船は物資輸送のほかに、享楽で利用されたり、通信使の参府のときにも用いられた。

Book with illustrations of Saigoku Daimyo's ship and art signatures



## 15. 東西船路名所記

神戸大学海事博物館

上段に各地の情報、下段に航路図を絵図化している。伏見からはじまり、本州下関までは詳しく示され、九州にいたっては東西は小倉から長崎、南は宇土までを収めた簡略化したものになっている(掲載箇所)。また、諸国の船が大坂のどこに着船するかも記され、筑前船は北天満の筑前橋あたり、小倉や下関船は筑前橋へ停船することが定められていた。また、各藩の川船の幟、家紋なども収められるなど、単なる名所記というよりは、便覧のようなものとして作成されたと考えられる。

Records of sea route and the sights



## 16. 海路安心録

1816(文化13)年  
神戸大学海事博物館

四方を海に囲まれている日本にとって、航海の方法を記しておくことは重要なことだった。そこでこの資料は、1816(文化13)年に刊行され、方位から造船の方法、航海の仕方までを収めている。また、真偽はどうであれ海から水を取るときの方法が図入りで記されている。まさに海洋国日本を象徴するような資料であり、航海全般にあたっての心得などもある。なお、巻末には方向表も所収している。

Documents of safety at the sea



## 17. 望遠鏡(森仁左衛門作)

18世紀初期  
神戸大学海事博物館

望遠鏡(遠眼鏡)は1608年にオランダで発明されたといわれる。日本にはイギリス人が徳川家康に献上した1613(慶長18)年にもたらされている。これ以降、長崎貿易を通じてオランダから輸入していたが、軍用として各領主も所望するようになった。各地にもたらされた望遠鏡は国産化されるようになり、本資料もそのひとつである。金色の牡丹に唐草文をほどこしたこの望遠鏡は、長崎に住む森仁左衛門正勝により作られたものである。森仁左衛門は享保年間に活躍した人物で、徳川吉宗にも献上するほどの腕前だった。海外からもたらされた舶来品が日本の職人の手によって国産化し、その精度も従来のものから向上した事例のひとつが望遠鏡だった。

Telescope (made by Mori Jinzaemon)



## 18. 望遠鏡

1861(文久元)年頃  
神戸大学海事博物館

望遠鏡は領主層が買い求めていたものの、国内流通にともない庶民でも購入できるようになっていた。軍事を用途としていたものから趣味のために求める動きへと変容した。本資料は1861(文久元)年に購入されたもので、蓋書に「文久元辛酉年初春求之 西尾充義」とある。西尾充義については詳らかではないが、三段に伸張する金色模様にはこだわりの意匠がみられる。先端と覗き口には蓋も付けられて、小型ではあるものの当時の望遠鏡が普及していた様子を知ることができる。

Telescope



## 19. 船箆笥

神戸大学海事博物館

船箆笥には廻船の船頭などが船中で利用した衣類用の大型の箆笥(半櫃)と船鑑札・売買仕切書・金銭などを入れる廻船用のもの(懸硯)があった。本資料は後者の懸硯になり、持ち運べるように天井部分に持ち手がある。懸硯は重要書類が入られることがおこったため、手提金庫のように和船から陸にあがるときは携帯して宿泊先まで持っていった。和船の船頭が所持していた懸硯は、頑丈なことはもちろん意匠にこったものを使われることが多く、この資料には裏蓋に美人図が貼られている。当時の船頭の趣味の一端もうかがい知ることができる。

Sailor's chest



## 20. 瓊浦港碇泊之図

神戸大学海事博物館

瓊浦とは江戸時代の長崎の別称で、勘定方役人として長崎奉行所に赴任してきた文化人・大田南畝(蜀山人)も長崎時代の思い出をつづった書物『瓊浦雜綴』という作品を残している。この錦絵は長崎港に停泊している唐船に荷揚げのためであろうか、小船で近づいている場面を描いている。手前の小船の仕様も先で停泊している本船と同じ形状となっており、乗組員の4人も唐人である。月琴など中国の楽器も積まれている。鎖国体制下であっても長崎港にはオランダ船と中国船が貿易のために停泊していた。そのような光景は、日本では稀なことで、中国船の浮かぶ瓊浦港の光景は好まれる画題だったのである。実際の荷揚げの場面を描いたというよりは、情趣的にとらえた作品といえよう。

Picture of Nagasaki anchorage



## 21. 磁石

神戸大学海事博物館

磁石とは磁気によるコンパス・羅針盤の俗称で、航海用としては少なくとも中世後期には使われだしたといわれる(方位磁石)。近世では一般的に普及し、方角を認識するための道具として船頭たちが利用していた。そもそも方位磁石は船上での利用には不向きであった。それは、風波による揺れの問題だったが、これに改良を加えられていった。この資料は方角を十二支で表現しており、「子=北、卯=東、午=南、酉=西」とし、これをさらに等分した十二方位である。

Magnetic compass



## 22. 清俗紀聞

1799(寛政10)年  
西南学院大学博物館

清俗紀聞は長崎奉行中川忠英が手附出役だった近藤重藏に命じて貿易のために中国から長崎に訪れていた唐人(清人)から聞きとり、これを書き記したものである。その内容は中国の年中行事や礼儀作法、車輿や服飾、屋室や飲食、器財、玩具、日用品など全般にわたる。本書は図入されるなど、詳細な記録書となっているが、この絵画を担当したひとりが石崎融思である。石崎融思は唐絵目利で、写実的な洋風画を得意とした人物である。本書により当時の中国文化を知ることができるとともに、日本に与えた影響などもわかる。『清俗紀聞』は中川忠英が江戸に戻ったあと(勘定奉行兼帯関東郡代在職中)の1799(寛政10)年に完成した。

Records of Chinese customs and culture



### 23. 紅毛人硯屏

19世紀  
西南学院大学博物館

ポルトガル人やスペイン人のことを「南蛮人」といったことに対して、オランダ人のことを「紅毛人」という。鎖国体制確立以降、ポルトガル人が追放されると、オランダ人が長崎で居住するようになる。そこで美術工芸品の素材の対象もオランダ人へとシフトするようになる。本資料も紅毛人全身を描いたものになるが、周囲に螺鈿細工がほどこされているなど、控えめながらも日本人の職人技術の高さが垣間見られる。硯屏は硯のそばに立てて、ほこりなど防ぐ小さな衝立で、意匠にこだわったものがおおくつられた。なかには書院飾りにもなり、異国趣味の空間に彩りをそえた。オランダ人をモチーフとした絵を硯屏にするなど、当時の鎖国という社会状況を色濃く反映している。

Inkstone screen of a Dutch



## 24. 紅毛人プラケット

19世紀  
西南学院大学博物館

これは紅毛人をモチーフとした小型の壁かけ「プラケット」で、これに類するものが壁にかけられる大型の飾り「ブランク」である。江戸時代、日本から数多くのブランクやプラケットが輸出されたが、オランダ人が個人的に特注して製作されることもあった。蒔絵技術による描写は18世紀後半に西洋で流行していたことから、出島オランダ商館員たちを通じて日本にもたらされたものである。原画をもとに蒔絵装飾されるプラケット(ブランク)は、今日にも数多く現存している。海外の著名な名勝地の銅版画などをもとに描かれたが、精微な表現を可能としたこの技法は日本の職人の手によって数多く作られた。なお、裏面には長崎八景のひとつ「神崎帰帆」が描かれている。なお、本資料の詳細は45頁から49頁を参照されたい。



神崎帰帆

Small wall hanging of a Dutch made of lacquer

# Ⅲ. 想いを込めた絵馬

鎖国体制下において海外との関係が限定された日本であったものの、国内においては海路が充実し、おおくの船が行き交った。船の寄港地は、賑やかな町へと発展し、経済的な富を蓄えていくことになる。こうして多くの物資を運んできた船は、人々から“財福”の象徴として認識されるようになった。船への想いも強まるところとなり、国内の船はもとより、南蛮船が行き来していた時代に想いをはせて、これを社寺に奉納する絵馬に託すようになったのであった。

## 25. 国宝扁額角倉船(模写)

神戸大学海事博物館

安土桃山時代から江戸時代前期にかけての朱印船貿易家である角倉了以の朱印船(角倉船)を描いた扁額の模写。角倉船は安南や東京(ベトナム)に派遣されており、武器や硫黄などを持っていき、日本には薬種や書籍をもたらした。安南とは1603(慶長8)年から貿易を開始し、1611年には息子素庵に引き継がれて展開された。航海祈願の扁額絵馬は1633(寛永10)年に清水寺に奉納された。

Picture of Suminokura trading ship (copy)



## 26. 国宝扁額末吉船(模写)

神戸大学海事博物館

朱印船貿易家であるとともに撰津国平野の代官である末吉孫左衛門は、関ヶ原の戦いに協力して、戦後に銀座頭役として銀貨の鑄造をおこなうようになる。あわせて異国渡航許可書である朱印船を発給され、末吉家一族が毎年のように朱印船貿易に従事した。末吉船扁額も角倉船と同年の1633年に清水寺へ奉納された。本資料はその模写になる。

Picture of Sueyoshi trading ship (copy)



## 27・28. 和船絵馬

神戸大学海事博物館

船絵馬は船頭や水主が航海の安全を祈願して社寺に奉納するものである。鎖国体制確立以前は、海外渡航にさきだつて奉納されていることがおおく、それだけ航海は危険と隣り合わせだった。鎖国以後は船絵馬奉納も下火となつていき、18世紀半頃からは舟才船の船絵馬がみられるようになっていく。現存する船絵馬の9割がこれにあたり、大坂には専門の絵師も出現した。写実性に富んだ船絵馬も作成され、画家並みに落款をいれるものもいた。彼らは船絵師という肩書きを使うようにもなり、これに追随するかのようには絵馬師が出現した。資料の上段は弁天丸と久伝丸の絵馬で1838(天保9)年4月に越後国蒲原郡荒井浜阿部と文太が奉納。下段は明王丸・稲荷丸・住徳丸・福王丸・昭栄丸の絵馬で1874(明治7)年1月、備中国浅口郡連島湊福嶋屋和平次が奉納したものである。

Votive tablets of sailors



## 29. 南蛮船奉納絵馬

19世紀  
西南学院大学博物館

鎖国体制確立以前、南蛮船が日本に多くの文物をもたらした。ポルトガル船はマカオを拠点にし、スペインはマニラを拠点に貿易を展開していた。1624年にスペイン船、1639年にポルトガル船が日本への来航を禁じられると、オランダが貿易を独占することになる。しかし、南蛮船がもたらしていた華やかな時代は、後世にも伝えられるところとなり、本資料のような南蛮船を描いた絵馬が社寺に奉納されている。南蛮人行列奉納絵馬と同様に、蓄財を祈念したものになるが、当時のきらびやかな時代は忘れられることなく、聞き伝えられていたことを示す。なお本図は、宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する南蛮屏風の左隻部分にあたる。本資料の詳細は本図録45頁から49頁を参照されたい。

Votive tablet of Westerner's ship



### 30. 南蛮人行列奉納絵馬

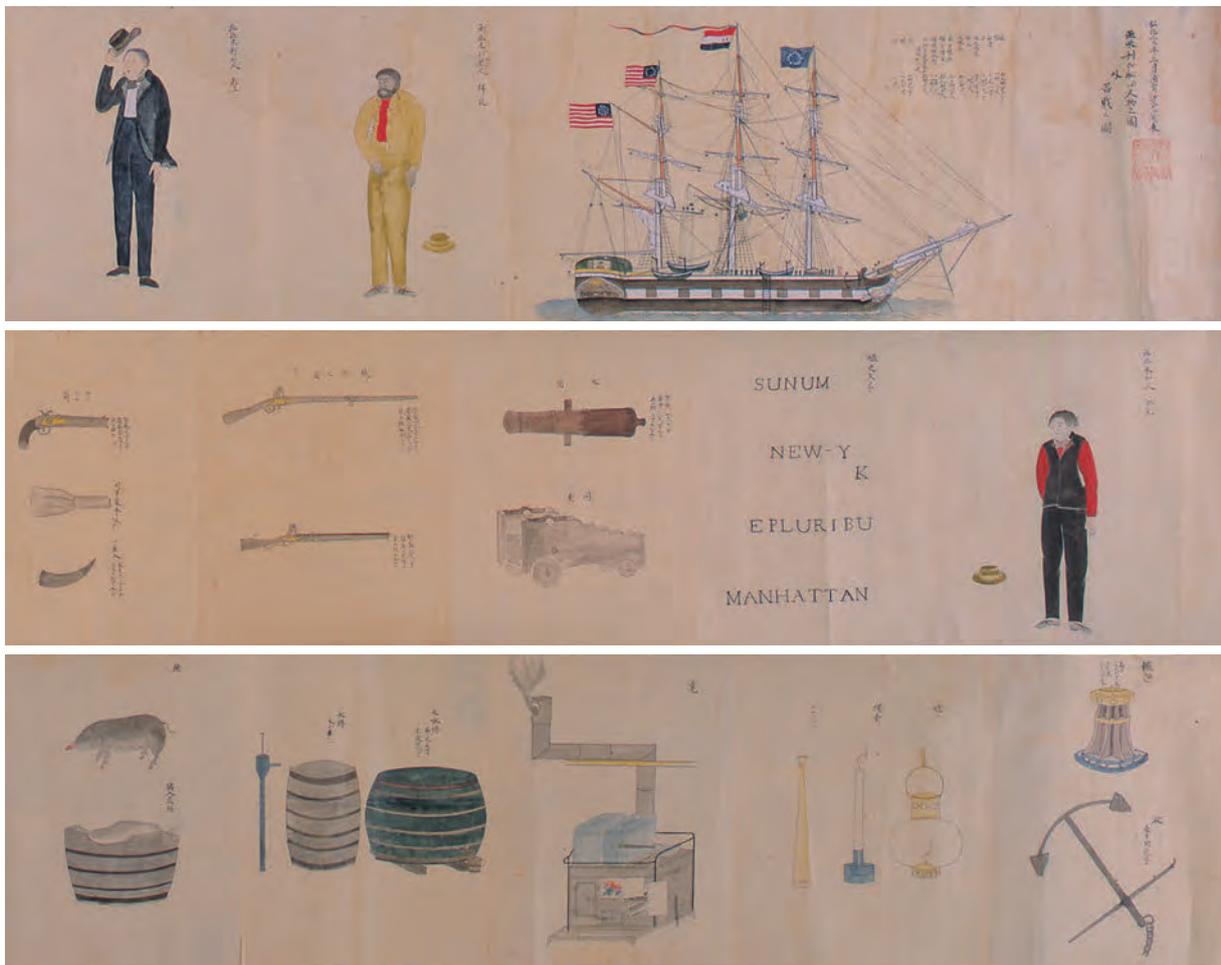
19世紀  
西南学院大学博物館

ポルトガル人・スペイン人などを南蛮人というが、鎖国体制確立前、彼らがもたらした西洋の新しい文物は、南蛮文化として花開き、一世を風靡した。彼らが上陸して行列をなす姿は、狩野派をはじめとする絵師により描かれている。これらを南蛮屏風というが、当時珍しい文物を運んできた南蛮人は財をもたらし存在でもあった。この南蛮人行列奉納絵馬も社寺に奉納されたものになるが、蓄財を祈念して描かれたものであろう。原図は現在、南蛮文化館が所蔵している南蛮屏風の右隻部分にあたる。なお、本資料の詳細は本図録45頁から49頁を参照されたい。

Votive tablet of Westerner's parade

# IV. 開かれた海—鎖国の終焉

1853(嘉永6)年、日本にひとつの転機があった。江戸湾の浦賀沖にペリーが率いるアメリカ海軍東インド艦隊「黒船」四隻があらわれた。武力による開国をにじませながら交渉がおこなわれ、ついに日米和親条約、さらに日米修好通商条約を締結させる。1858(安政5)年には、領事裁判権を認め関税自主権がない「安政五ヶ国条約」を、米・英・仏・露・蘭と締結する。こうして、江戸幕府が堅持してきた鎖国体制が崩壊するとともに、外国船が行き交う開かれた島国となった。制限された時代からの開放は、不平等と引き換えに訪れたのであった。

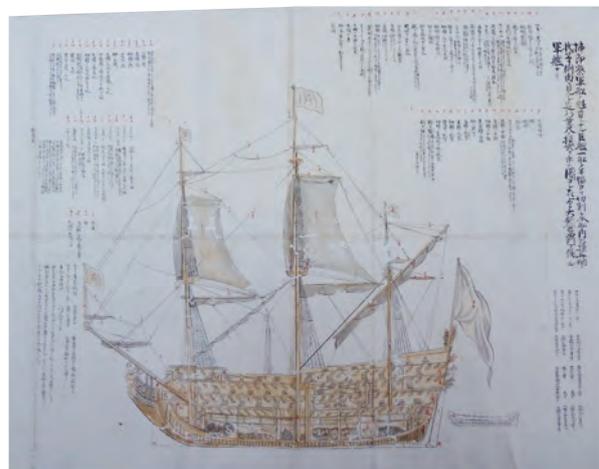


## 31. 亜米利加船人物之図

19世紀  
神戸大学海事博物館

本資料は、ペリー来航以前の1845(弘化2)年、マーケイター・クーパー船長が率いる捕鯨船マンハッタン号が日本人漂流民22名を保護して浦賀へ訪れたときの図である。浦賀入港を許されたクーパーは浦賀奉行とも面会した。通商を求めてはなかったことがその要因とされる。本資料にはマンハッタン号が詳細に描かれているとともに、乗組員などの肖像もあることから見聞したあと、記録するために製作されたものと思われる。

Picture of the arrival of American ship



## 32. 拂郎察軍艦全図

19世紀  
神戸大学海事博物館

フランス軍艦の外観全景から内部構造などまで描かれている。この全景の軍艦は主力船であり、数多くの乗組員をともなった軍艦が旗を翻しながら風に乗ってすすんでいる様子を表現している。そのほか、内部構造の絵図を詳しく示されていることから、技師としての知識をもつものがこれを描いたと考えられる。幕末における海外列強が差し迫っていたなか、海軍強化に力を入れたしていた幕府が今後の参考のために記した図録といえよう。

Picture of French ship



### 33. 火輪大軍船図記

嘉永7年  
神戸大学海事博物館

アメリカ軍艦の外観や船上の様子、下層部、備品、乗組員などまでを含めて描いている。船上や船中での乗組員のリアルな描写もある。また、黒船に備え付けのバッテリーや碇、上官の衣装まで詳しくある。オランダ人・中国人以外の訪れは、多くの人びとに衝撃をあたえ、多くのスケッチや想像画が流布していった。なお、本資料に収められている図は次の通りである。①大火輪船②蒸気船上層の図③船中一層下の図④上官人之乗端船バッテリー⑤碇⑥碇⑦蒸気船ニハツテラ釣タル図⑧舩之図⑨上官人の衣装⑩上官人全身の図⑪上官人の冠物⑫船将の帽⑬士官の帽⑭劔⑮煙筒⑯巻煙草

Picture of American warship

園地過去の條と其地左面の亞墨利加コンシユル連  
 せし  
 其著とも諸引合書を以所著にコンシユル元後れ上  
 過去の期限條の條ハコンシユルより十五に依て相  
 叶ふハ一其期限ハ其より一年と減せし  
 第八條  
 日本に於る亞墨利加人自其國の宗法とて其  
 拜堂と居留場の内ニ置も障りなく其其建物を  
 破壊し亞墨利加人宗法と自ら念するハ妨りなく  
 亞墨利加人日本人の堂堂と毀備する事なく又交  
 して日本神佛の礼佛と坊け神佛像を毀する事  
 ありしハ  
 双方の人民互に宗法と自ての事論ありしハ日  
 本長崎後において踏繪の仕來りハ既小廢せり

元レに違す  
 其者も諸引合書を以所著にコンシユル元後の上  
 過去の期限條の條ハコンシユルより十五に依て相  
 叶ふハ一其期限ハ其より一年と減せし  
 第七條  
 日本に於る亞墨利加人自其國の宗法とて其  
 拜堂と居留場の内ニ置も障りなく其其建物を  
 破壊し亞墨利加人宗法と自ら念するハ妨りなく  
 亞墨利加人日本人の堂堂と毀備する事なく又交  
 して日本神佛の礼佛と坊け神佛像を毀する事  
 ありしハ  
 双方の人民互に宗法と自ての事論ありしハ日  
 本長崎後において踏繪の仕來りハ既小廢せり

②

①

日本小わわく踏繪の仕來りハ既小廢せり  
 第六條  
 日本に於る佛堂為人の廟小を建物とすハ其  
 ミニトル又ハコンシユル事ありしハ  
 第七條  
 佛堂為人日本人小對し其坊のよりハ日本及人  
 日本佛堂為人對し其坊のよりハ日本及人  
 佛堂為人日本人小對し其坊のよりハ日本及人  
 佛堂為人日本人小對し其坊のよりハ日本及人

神奈川 本館一ノナリ  
 箱館 本館一ノナリ  
 兵庫 本館一ノナリ  
 長崎 本館一ノナリ  
 新潟 本館一ノナリ  
 兵庫 本館一ノナリ  
 神奈川 本館一ノナリ  
 箱館 本館一ノナリ  
 兵庫 本館一ノナリ  
 長崎 本館一ノナリ  
 新潟 本館一ノナリ

④

③

礼拝堂を居留場内に置  
 礼拝堂を居留場内に置

②

踏繪の仕來りハ既小廢せり  
 踏繪の仕來りハ既小廢せり

①

此條約の條も其未年六月二日即其未年六月二日  
 此條約の條も其未年六月二日即其未年六月二日  
 此條約の條も其未年六月二日即其未年六月二日  
 此條約の條も其未年六月二日即其未年六月二日

⑤

34. 安政五ヶ国条約写

西南学院大学博物館

1858(安政5)年、日本が米蘭露英仏と締結した修好通商条約を安政五ヶ国条約という。最初に結ばれたのが日米修好通商条約で、日本側は堀田正睦・井上清直・岩瀬忠震が全権となり、アメリカ総領事ハリスとの間で調印された。日本にとっては領事裁判権(治外法権)を認め、関税自主権のない不平等条約が締結された。箱館・神奈川(横浜)・長崎・新潟・兵庫(神戸)を開港し、ここに領事を駐在させることとされ、江戸・大坂を開市することも規定される。また、居留地内への礼拝堂建設や絵踏の廃止も条項に含まれた条約が締結された。なお、掲載番号①は日米、②は日蘭、③は日英、④は日仏、⑤は日露との修好通商条約の写しである。

Transcription of Ansei Five-Power Treaties



### 35. 万国人物図会

19世紀  
西南学院大学博物館

万国人物図は江戸時代初期から作成されており、鎖国という状況下においても外国人の存在はある程度、おおくの日本人に認識されていた。本図は開国後の明治期に作製されたものになるが、日本(「大日本」)を中心に配し、北にロシア、南にオーストラリア、東にアメリカ、西に中国・ヨーロッパがある。日本をみれば、公家・武士・飛脚の姿があり、日本を象徴するかのようには神社・富士山・太陽が描かれる。北海道は蝦夷とあり、渡島・箱館・樺太と続く。さらにその北部には「おろしや」(ロシア)があり、樺太にはロシアの傭兵が配置されている。本資料の構図は風刺的に描かれているところがおおく、明治期の日本人が世界をどのように認識していたのかが示される。

Image of foreign people

万国図會

萬國人物圖會



和蘭陀



大日本



九州



### 36. 万国一覽之図附人物風俗之節

19世紀  
西南学院大学博物館

本資料には大清(中国)・魯細亞(ロシア)・阿蘭陀(オランダ)・英吉利(イギリス)・亜墨利加(アメリカ)・佛蘭西(フランス)・伊斯波尼亞(イスパニア・スペイン)の国々の建国や風俗、歴史などが記されている。特に伊斯波尼亞には、伴天連・いるまんがキリスト教を広めたという記載がある。また、左下にある万国地球輿地全図はオランダ製をもとに作製され、海洋を「大東洋」・「小東洋」・「小西洋」・「大西洋」と四つに分けて記している。この上段には日本の国割とこれにともなう村数、神社、寺院数の記載も見られる。

Records of foreign customs and histories with the pictures



# 萬國一覽之圖

**大清** 支那も中華共云  
世界第一の大明なり

**魯細亞** あちやうしうふふ  
ちうをちうちう  
世界第一の大明なり

**英吉利** ちうちうのちう  
ちうちうのちう

**佛蘭西** ちうちうのちう  
ちうちうのちう

けしき... 支那も中華共云... 世界第一の大明なり

本國中... 支那も中華共云... 世界第一の大明なり

本國中... 支那も中華共云... 世界第一の大明なり

本國中... 支那も中華共云... 世界第一の大明なり

**長崎の海上**  
北京、南京、上海、  
福州、香港、折江、  
雲南、上海

**阿蘭陀** 本國一萬九千九百  
新島一萬四千

**亞墨利加** 海上五千

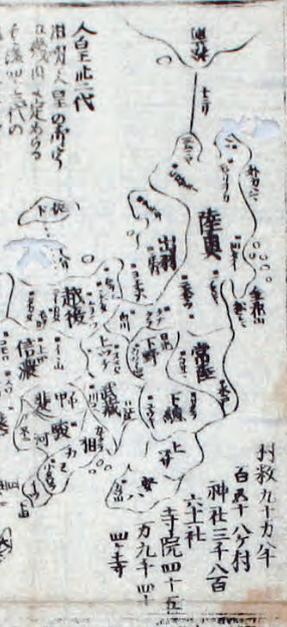
**伊斯波尼亞** 一萬二千

村教九十九年  
百三十分  
神社三千八百  
寺院四百五  
方九千四

此圖阿蘭陀の製  
分全圖を以て  
大東洋、小東洋、  
小西洋、大西洋を

此圖阿蘭陀の製  
分全圖を以て  
大東洋、小東洋、  
小西洋、大西洋を

此圖阿蘭陀の製  
分全圖を以て  
大東洋、小東洋、  
小西洋、大西洋を



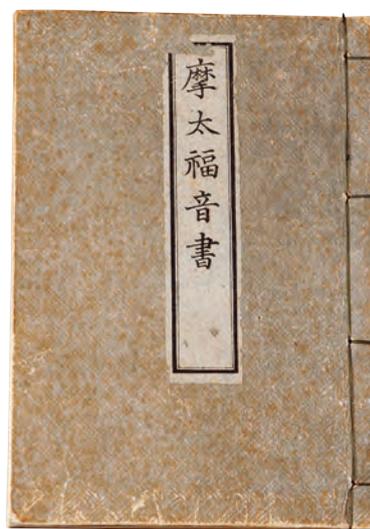
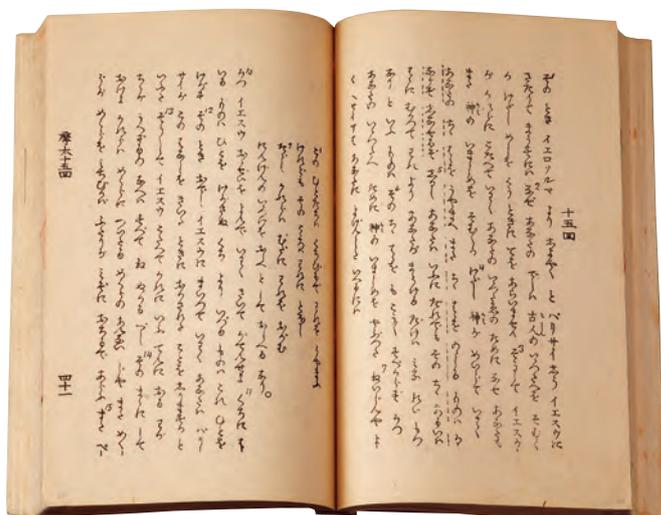


### 37. ベッテルハイム訳聖書馬太伝福音書(複製)

1855年頃(原本)  
西南学院大学博物館

安政の開国にともない、多くの宣教師たちが日本を訪れるようになり、日本伝道の再開を予見させるようになる。しかし、日本国内では依然としてキリスト教の信仰は禁じられており、市中にはキリシタン制札も掲げられていた。ハンガリー人の医師ベッテルハイムはイギリス人女性と結婚して英国籍となり、宣教師を志して1845年に琉球へ派遣される。琉球も禁教下にあったが、ここで、四福音書(『路加(ロカ)伝福音書』、『約翰(ヨハネ)伝福音書』、『聖差言行伝』(使徒行伝)、『保羅寄羅馬人書(パウロ ロマびとによするのしよ)』)の全てを琉球語訳した。マタイ福音書は未刊行のままで、1976年にその稿本が発見された。

Gospel of Matthew, J. B. Bettelheim version (Replica)



### 38. ゴーブル訳聖書摩太福音書(複製)

1871年  
西南学院大学博物館

バプテスト派の宣教師J・ゴーブルは、1860年(万延元年)にペリー艦隊の水兵として来日して宣教活動をおこなうようになる。貧しかったゴーブルは十分な神学教育を受けていないにもかかわらず、ギリシャ語の原語と欽定訳聖書からの木版平仮名の「摩太福音書」を翻訳した。1864年(元治元年)から始めて、1871年(明治4年)に『摩太福音書』を東京で出版する。これが国内で最初に刊行された和訳聖書である。

Gospel of Matthew, J. Goble version (Replica)

# 論考



豊前國

豊前國

豊後國

豊後國

# 神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館の取り組み

神戸大学大学院海事科学研究科准教授  
野村 昌孝

## 大学の沿革と博物館の概要

平成15年(2003)10月に神戸商船大学が神戸大学と統合して発足した神戸大学海事科学部は、国際都市神戸の一角、大阪湾を望む深江キャンパスにある。海事科学部・大学院海事科学研究科では、海事社会で活躍できる専門的知識だけでなく基礎的な教育研究に重点を置きながら、総合大学の特色も活かした幅広い知識、応用力や開発能力を身につけるとともに国際的・学際的・総合的な視野を持ち、多様な学問を基礎にして応用力があり社会で通用する人材の育成を目指し、船舶職員のみならず、海事行政官、研究者、各種メーカー、銀行、商社など多岐にわたる分野へ卒業生を送り出している。

海事科学部の前身となる神戸商船大学は、わが国造船界の先覚者である川崎正蔵氏の遺志を継いで大正6年(1917)9月に創設された私立川崎商船学校(設立者川崎芳太郎氏)に始まる。同校は大正9年(1920)8月に国家に献納され、官立神戸高等商船学校に昇格後、戦時措置により昭和20年(1945)4月に東京、清水の両高等商船学校とともに高等商船学校として統合される一方、校舎等は海技専門学院(現在は芦屋市にある海技教育機構海技大大学校)に引き継がれた。昭和27年(1952)5月、神戸商船大学が由緒ある深江の地に新制大学とし発足し、およそ半世紀の歳月を経て現在の神戸大学海事科学部誕生に至る。

海事博物館は、海事思想普及のため海事博物館が必要と考えた小関三平神戸高等商船学校第二代校長(1923～1935)による関係資料収集に始まる。文書類200点程度を集めたが、目録が作られないまま戦災のため焼失した。神戸商船大学設立後、昭和32年(1957)に学内に分散していた資料を集めて海事参考館が開設された。開館当時の資料は、高等商船学校時代からの模型類、戦後関係者が各方面から収集した教材類の一部、開設にあたり卒業生その他から寄贈を受けた学校沿革資料などであった。昭和33年(1958)に完成した150トンの小型練習船「深江丸」を利用し、瀬戸内海周辺の資料の調査収集と海事思想の普及を意図して海事調査が昭和35年(1960)夏に始まった。昭和36年(1961)には、名称を神戸商船大学海事資料館と改称した。昭和48年(1973)からの10年間、文部省から配分された予算により年報を発刊するとともに江戸時代の航路図などの購入を行った。平成7年(1995)1月の大地震は、展示物はもとより倉庫に保管していた資料にも大きな被害を与えた。復旧予算が付いた一部の重要展示物以外は倉庫内に散乱していたが、神戸大学との統合前に商船大学OB有志が散乱した資料の整理に乗り出し、念願であった資料の本格的な整理事業が始められた。神戸大学との統合により現在の神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館となったが、この間展示館も場所を変え、現在は昭和42年(1967)に完成した講堂の一階を展示室などとして利用している。現在、週3日午後だけではあるが開館することになり、OBが交替で勤務し、事務担当のパートタイマーと協力して来館者の案内、解説、資料の整理などの運営に当たっている。



博物館外観

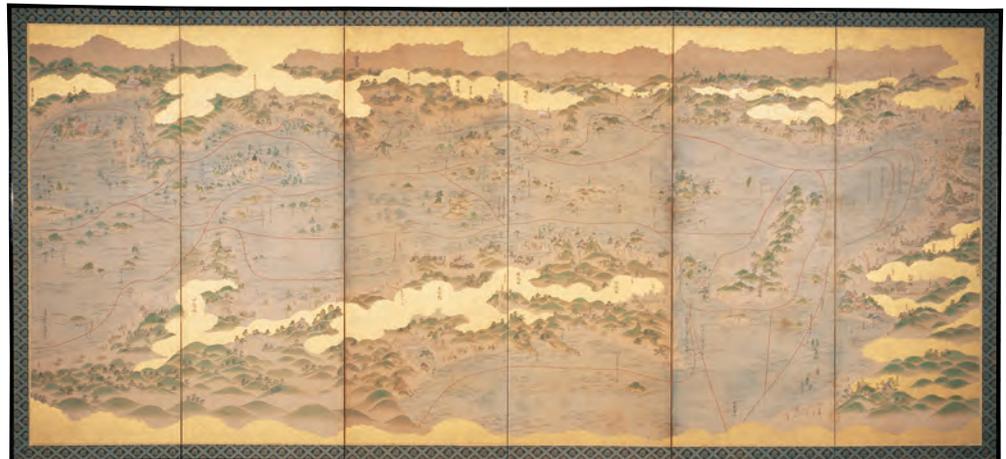
## 主な所蔵資料

本博物館の所蔵品は、広く海事に関するもの一般にわたっているが、開設当初以来資料収集に努力した教員が和船関係に特に造詣が深かったため、自然その方面の所蔵品が充実している。また、戦後の高度成長による資料の消滅を防ぐことを目的として昭和35年から実施された海事調査により集められた資料も多い。ユニークな収蔵品としては、明治初年の和船板図(設計図)、大小20点あまりの和船模型、それに関連して和船の一部や部品資料がある。ほかに、航海の安全を祈願し神社仏閣に奉納した船絵馬、船頭たちが手回り品を入れた船筆筒、和磁石、船具類、船鑑札や船大工道具も少数ながら所蔵されている。また、江戸時代の航路図や航海書などその種類・数も多量で、貴重な資料も数々あり、全国第一の充実ぶりといってよい。

これらの内、いくつかの資料がバーチャルミュージアムとして電子化され博物館Webページで公開されている。現在バーチャルミュージアムには、航海図・海路絵図巻として『海路図屏風下絵』、『海路図屏風六曲一双』、『江戸より長崎道中図巻』、『開成丸航路図』、『浪速至東都図解』、『海路絵図巻』、電子船舶模型として『北前船「天昭丸」』、『油槽船「Stanvac Japan」』、海事関連古文書として『造船大工見積秘伝書』が電子データならではの機能で細部に至る点まで閲覧・確認できる。

また、戦前からの旅客船関係資料を集めたユニークな「仲島忠次郎コレクション」が昭和55年(1980)頃に寄贈された。学生、OBらの長年の努力により撮影、整理され、海運・造船会社等の案内・報告書類、携帯用の時刻表、テックプラン・キャビンプラン、進水絵葉書、ポスターなど貴重で珍しい海外資料、国内資料を含めて14000点近いコレクションとなっている。さらに、戦前・戦中の日本商船全船を網羅する約4600隻の「日本の商船隊行動記録集」ならびに102隻に及ぶ1/600精密船舶模型などから構成される船舶資料集「山田早苗コレクション」が平成16年(2004)10月に寄贈されるなど、和船以外の資料も多くなっている。

現在の所蔵品数は、22000点の歴史実物資料を有し、その内、模型類約400点、写真類約5000点、他に書籍文書類多数あり、一般の人々の縦覧に供している。全国多数の大学のうちにも、これだけの海事関係資料のみを所蔵・展示する大学は少なく、ユニークな博物館として関係者からの注目も高く、本学にとっても誇るべき施設であると言えよう。



海路図屏風六曲一双

## 博物館の活動・事業

所蔵資料は、学生の教育活動に常時利用されており、地域小中学生の希望、学内諸行事開催の際には見学会を実施している。展示活動としては、常設展示、企画展、市民セミナー（公開講座）を行っている。所蔵する豊富な資料から、江戸末期の北前船模型類、和船関係、航海計器類など約260点が「常設展示」されており、企画展開催の際に併せて資料の展示換えを行っている。

平成17年の海の日から始まった「企画展」も毎年開催しており、今年で8回を数える。毎回テーマを決め、今まで公開される機会がなかった博物館所蔵資料の展示とともに他の博物館、関連企業からも資料を借りて毎年7月の海の日から10月末までの期間で実施している。企画展のテーマに関連してさらなる詳細な内容を学内外の講師を招いて講義を行う「市民セミナー（公開講座）」も10月・11月の土曜日に5回にわたり実施している。平成7年の震災の折には、被害を受けた資料等の修復過程で、資料の永久保存方法としてデジタルカメラを使った映像によるデータベース化とともに全国に散在している海事資料とのリンクを目的としたアーカイブ化も積極的に進めてきた。現在では、相当数の資料が電子情報として登録され、博物館Webページで公開するとともに3000点あまりの資料がデータベース化・検索可能となっており、外部からの資料貸し出しに際してもよく利用されている。

学芸員など専門の常駐スタッフも配置できないが、本博物館の現状は、資料の収集・整理・保存からようやく社会に公開できる段階についてところである。今後は、さらなる活動の充実と大学が有する博物館として、社会に対して海事関連の研究調査が可能な「研究センター」としての役割も視野に入れるとともに、広く海事に関心を持つ人たちの集える「夢溢れる」博物館の実現を目指している。



企画展会場風景



市民セミナー（公開講座）



わせて、抜荷という密貿易の横行は、国内流通統制を混乱させることになるため、これを厳しく取り締まった。日本人が舶来品に目を付けるのは、当時手に入らない稀少なものは高値で取り引きされ、羨望の的だったためであろう。人間のなかに一度芽生えた好奇心というのは、決して失われるものではなかった。また、技術的な修得にも熱心な日本の職人たちは貪欲に学ぼうとした。次節で取り上げるブラケットなどはその一例であり、遠眼鏡についても外国の技術が国産化されていったものである。

新しい“モノ”を目にした近世人は、様々なものに刺激をうけ、探求した。また、一時期を謳歌した南蛮文化を聞き伝えるなかで、憧れをもち、追憶のなかで新時代に適応していこうともしていたのである。出島や唐人屋敷が設けられても、失われることのない心的部分は、脈々と生きていたのである。

## 輸出技術の転換 ～紅毛人ブラケット～

壁掛けのことをプラークやブラケットといい、プラークというと大型壁掛け、小型のものをブラケットと称して区別される。両者とも銅版の表面に漆が焼き付けられ、そのうえに金や銀の平蒔絵で絵を描くことは共通する。また、本体部分の上部には掛け金具がつく。18世紀後半に西洋で原画をもとに名勝の風景や特定の人物を描いたプラークやブラケットがつくられるようになり、この技術はオランダ人が日本に伝えるところとなった。1780年から1800年頃にかけて、出島で発注されたブラケットやプラークのおおくが輸出された(日高薫「西洋版画写しの輸出漆器－蒔絵プラーク・ブラケット」『歴博』120号)。

オランダ人が発注していたことから、ここに描かれた人物は外国の貴人が多い。例えば国立歴史民俗博物館が所蔵するブラケットには「グスターヴ三世」(1788年)(スウェーデン国王)が製作されている。ほかにヨーゼフ2世



紅毛人ブラケット 表



紅毛人ブラケット 裏



長崎八景「神崎帰帆」

(神聖ローマ皇帝)、フリードリッヒ2世(プロイセン王)のプラケットなども現存している。また、神戸市立博物館にも「蒔絵西洋人物肖像プラーク」が所蔵されている。これらは共通して外国人をモチーフとしたもので、先に記したように出島に滞在したオランダ人から原画を渡された日本の職人が製作したものである。

本学博物館が所蔵する紅毛人プラケットは上記のものとは性格を異にする。楕円形の表面には、長崎の絵師によってよく描かれる構図で、オランダ人の立ち姿を表現している。オランダ人が狎であろうか子犬をひいている。さらに、その背景には家屋に草木、川が描かれている。外側周囲には青貝細工で草々が配されている。なお、裏面には長崎八景のひとつ「神崎帰帆」が描かれ、これには原図がある。

長崎八景の神崎帰帆の原画は、大和屋主人磯野文斎によるものである。画面中央にあるのが唐船で、貿易を終えて右下の神崎神社の前を通過する場面を描いたものである。岸壁の突き出たところを神崎鼻といい、神崎神社の後方にそびえた岩はその姿が観世音の裳のようで神々しく映っていた。そのため、ここを通過して帰帆するときには、敬意を表して金鼓を鳴らして通過していた。画面左上「神崎帰帆」の文字の左にある花押は文斎のサインである。

このプラケットは、神崎帰帆の原画をもとに製作されていることは間違いない。但し、絵中にある版元名や文斎の花押は省略されている。しかし、線の細さで肌肌表現されている技法は立体的な表現を可能とし、原画にはない繊細さも表現されている。いままさに帰帆しようとする唐船の姿がいきいきと描かれ、長崎八景にふさわしい。

プラケットの表面にはオランダ人と狎が描かれ、さらに長崎の職人が青貝細工を施している。裏面には長崎八景の神崎帰帆を題材にした唐船を描いている。江戸時代の鎖国体制下において、交易が許されていたオランダと中国を表裏のモチーフとしたこの一枚は、近世日本の姿を象徴している。注文をうけて製作し、輸出していた技術が、国内向けにも転化され、製品化された。まさに長崎土産ともいべきプラケットが作られていたといえよう。

## 南蛮文化への追憶 ～南蛮船奉納絵馬・南蛮人行列図奉納絵馬～

南蛮文化を代表する資料のひとつが南蛮屏風であろう。これは大別して、南蛮船の来航と南蛮人の行列図で構成される一双からなるものが多い。南蛮屏風は狩野派が確立し、これは町絵師によって描かれるようになった。南蛮屏風は商家や廻船問屋などに伝えられ縁起ものとして重宝されたようである。この南蛮屏風は三類型からなり、第一型は左隻が入港した南蛮船と荷揚げの場面、右隻が商家の町並みとカピタン・モールの行列、さらには南蛮寺などが描かれている。第二型は右隻に第一型を描き、左隻に南蛮船と異国宮殿、第三型では右隻は二型と同じで、左隻に異国宮殿と前庭の情景を収める。もっぱら第一型がおおいようで、現存確認の全体の四分の三以上を占めている。

さて、本学博物館の所蔵資料に南蛮船奉納絵馬と南蛮人行列奉納絵馬がある。これらは南蛮屏風をモチーフに描かれた珍しい事例である。紹介に先立ちいくつか絵馬の種類をふれておきたい。たつの市立辰野歴史文化資料館編『描かれた船 - 室津賀茂神社の文化財』(2008年、兵庫県)に絵馬について詳しい解説をみる。

絵馬といわれるように神馬を奉納されることが一般的で、室津賀茂神社に所蔵される絵馬もその例になるが、ほかの地域にもよくみられる。あわせて船を素材に描かれた絵馬も多数あるようだ。本展覧会でも紹介した角倉船絵馬や末吉船絵馬、さらに長崎市清水寺蔵の末次船絵馬などといったいわゆる“朱印船絵馬”は異国へ向かうにあたり航海安全を祈願したものになろう。これら日本の船を描いた絵馬に対して外国船をモチーフとしたものもある。

室津賀茂神社蔵の「蘭船図絵馬」(1799年)は長崎内中町の西山儀助と恵美酒町の上田力蔵により奉納されたものである。特に西山儀助に関しては長崎の人頭夫か荷駄宰領という運送業にかかわる人物であることが指摘されている(成澤勝嗣「描かれた異国船 - 賀茂神社の「蘭船図」絵馬を中心に - 『描かれた船』前掲書)。また、厳島神社にもオランダ船を書いた絵馬がある。鎖国体制確立以降、貿易相手国であったオランダ船の来航は、長崎に富をもたらしていたことから、このような絵馬が作成されたのであろう。

本学博物館が所蔵する絵馬は南蛮船と南蛮人行列図を描いたものである。先にふれたようにこの二つの絵馬は南蛮屏風をモチーフとしていることがわかる。ふたつの形状および画風から対になっており、南蛮船奉納絵馬には「掛奉」という文言があることから社寺に奉納されたことがわかる。そこで、ふたつの絵馬が何を原図に描かれたのか特定していきたい。

まず、南蛮船奉納絵馬であるが、これは宮内庁三の丸尚蔵館本をモチーフとしていることがわかる。左隻の第3扇から第6扇に相当する。

人物の服装や表情などに相違がみられるものの、基本的な構図は一致している。以下、いくつか共通点を示していくと、船の中央のマストの先端は十字架の形をなし、翻る旗には「王」の文字がみえる。マストをよじ登って

いる者や船首で犬を調教している者、船尾では娯楽を興じる者がある。船上では日本と南蛮人が対面して交渉中であり、本船に近い小船には白磁壺が載せられている。

次に南蛮人行列奉納絵馬だが、これは南蛮文化館蔵の南蛮屏風と酷似している。なお、南蛮船奉納絵馬よりも正確に写しとっていることがわかる。

南蛮文化館蔵の南蛮屏風右隻の3屏から5屏部分を模写したものである。南蛮人行列図での象徴的な場面である傘下のカピタン・モールの場面を描いているのは、模写した画者が南蛮屏風の構図や意味を理解していたともうけとれる。そのためか、本図は人物の表情や服装など精巧に模写されており、カピタン・モールが左手を胸にあて従者をともなっている様子。椅子を運ぶ黒坊や子犬をひく従者、さらには一行を出迎える修道士たちも表現している。また、人物、動物たちの振る舞いもそのまま再現されており、本図の脇役であろう覗き見る女性まで描かれている。商家の暖簾の家紋も一致するなど画者が忠実に模写しようとした姿勢が伺える。

南蛮船奉納絵馬の原図である宮内庁三の丸尚蔵館の南蛮屏風は、1617(慶長17)年に家康が静岡の来迎院に施入したと伝えられる屏風で1889(明治22)年、宮内庁に献納されたものである。南蛮人行列奉納絵馬の原図である南蛮文化館の南蛮屏風も慶長期の作品で、大阪府堺市にある旧家から発見されたものである。このふたつの絵馬を作成した画者がいつ、模写することができたのかは詳らかではない。この資料の作製時期が江戸末期ということ。さらに、南蛮人行列奉納絵馬に至ってはその精度の高さから確実に原図をみながら描いたといえ、南蛮屏風が旧家にあった時代に模写されたと想定される。南蛮船奉納絵馬については、精度の低さから、ラフスケッチが作成されたうえで、絵馬にしたためられたと思われる。二つの絵馬はあえて別々のところの南蛮屏風を描いていることが、画者のこだわりが感じられる。いずれにしても社寺に南蛮屏風を描いて奉納している姿は、往年の華やかな南蛮文化への追憶に裏付けられるものといえよう。



南蛮船奉納絵馬



宮内庁三の丸尚蔵館蔵

## おわりに

鎖国という幕府の対外的政策の一方で、国内では海外情報や文化、技術、製品などへの興味関心は高まっていた。貿易品をねらった犯罪や密貿易があとを絶たなかったり、長崎を訪れる遊学者が多かったのもそのためである。オランダ人と中国人が住み、貿易品が行き交う長崎は一種の憧れでもあった。この長崎の地には外国文化や技術が直接伝えられ、プラケットに象徴されるように、いつしか長崎土産の製品としても作られるようになった。まさに外国からもたらされた技術が国内向けに転化されたのである。

また、鎖国体制下にあったなかでも、近世人たちはキリシタン文化に彩られた南蛮意匠に想いを馳せていた。まさに南蛮船奉納絵馬や南蛮人行列奉納絵馬に裏付けられるように、華やかだった時代への回帰をもとめて社寺に奉納したのであろう。これを作成した画者は南蛮文化が謳歌した時代を知る由もないが、その華やかだった文化を先祖から伝え聞くところだったのである。そのため、南蛮屏風の性格を理解していたのであり、社寺へ奉納する画題としても選んだものといえる。

海外との交流を絶つという意味で閉塞感漂っているように感じる近世日本ではありながら、オランダや中国から多くの異国の文物がもたらされていた。他方で、キリシタン禁制下でありながら、これ以前の栄華な様子が伝えられるなど、近世社会は制限されたなかにも自由さをも持ち合わせていたといえよう。一度昇華した文化を受容した近世人たちは、その華やかな時代を決して忘れることなく、後世へ伝えていったのである。



南蛮人行列奉納絵馬



南蛮文化館蔵

## ■春季特別展 I

閉ざされた島 開かれた海—鎖国のなかの日本(会期：2012年6月2日～8月4日)

### 出品目録

|    | 資料名                | 英 訳   | 年 代         | 法 量                         | 数量 | 所 蔵       |
|----|--------------------|---|-------------|-----------------------------|----|-----------|
| 1  | 原城紀事               | Records of Shimabara-Amakusa Rebellion  | 1846(弘化3)年  | 26.7×18.7                   | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 2  | 肥前國五嶋転切支丹之類族存命帳    | List of surviving Christians of the Goto Clan in Nagasaki                         | 1776(安永6)年  | 27.0×19.8                   | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 3  | 宗門改影踏帳             | Documents with the name of apostates  |             | 31.8×22.4                   | 2  | 西南学院大学博物館 |
| 4  | 出島図                | Map of Dejima   | 1735年頃      | 26.0×32.0                   | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 5  | キリシタン制札            | Proclamation banning Christianity   | 1682(天和2)年  | 48.0×76.5                   | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 6  | 高札写                | Transcription of an official bulletin board with the law prohibiting Christianity | 1682(天和2)年頃 | (本紙部分)<br>31.0×343.0        | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 7  | 海路図屏風              | Map of sea route from Osaka to Nagasaki   |             | —                           | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 8  | 自大坂至長崎之図           | Map of sea route from Osaka to Nagasaki   | 1811(文化8)年  | 27.0×200                    | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 9  | 大坂より豊前小倉まで之海路図     | Map of sea route from Osaka to Kokura   | 18世紀後半      | 27.0×198                    | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 10 | 江戸長崎海陸図            | Map of land and sea route from Osaka to Nagasaki                                  |             | 30.0×900                    | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 11 | 御迎御座船屏風            | Welcoming boats for nobles  | 江戸時代中期      | 128.0×269.6                 | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 12 | 朝鮮通信使川御座船絵巻        | Picture scroll of envoys from Korea's Joseon Dynasty arrive in Japan              | 18世紀        | 28.9×765.8                  | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 13 | 川御座船寸法仕方書          | Measurement documents of roofed pleasant riverboat                                | 江戸時代中期      | 15.0×40.0                   | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 14 | 西国大名御船御座船図並武将花押切抜帖 | Book with illustrations of Saigoku Daimyo's ship and art signatures               |             | 25.3×18.6<br>見開き25.3×37.2   | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 15 | 東西船路名所記            | Records of sea route and the sights   |             | 11.0×16.0                   | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 16 | 海路安心録              | Documents of safety at the sea  | 1816(文化13)年 | 17.8×26.4                   | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 17 | 望遠鏡(森仁左衛門作)        | Telescope (made by Mori Jinzaemon)  | 18世紀初期      | 遠眼鏡<br>全長1.3m               | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 18 | 望遠鏡                | Telescope   | 1861(文久元)年頃 | 全長33.0                      | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 19 | 船箆筒                | Sailor's chest  |             | 42.0×35.0×25.0<br>(高さ・横・奥行) | 1  | 神戸大学海事博物館 |

|    | 資料名                  | 英 訳  | 年 代         | 法 量       | 数量 | 所 蔵       |
|----|----------------------|--|-------------|-----------|----|-----------|
| 20 | 瓊浦港碇泊之図              | Picture of Nagasaki anchorage                              |             | 44.5×34.0 | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 21 | 磁石                   | Magnetic compass   |             | 直径18.0    | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 22 | 清俗紀聞                 | Records of Chinese customs and culture                     | 1799(寛政10)年 | 24.7×18.0 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 23 | 紅毛人硯屏                | Inkstone screen of a Dutch                                 | 19世紀        | 24.4×16.6 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 24 | 紅毛人ブラケット             | Small wall hanging of a Dutch made of lacquer              | 19世紀        | 15.0×9.5  | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 25 | 国宝扁額角倉船(模写)          | Picture of Suminokura trading ship(copy)                   |             | 60        | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 26 | 国宝扁額末吉船(模写)          | Picture of Sueyoshi trading ship(copy)                     |             | 60        | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 27 | 和船絵馬                 | Votive tablets of sailors                                  |             | 45.9×63.7 | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 28 | 和船絵馬                 | Votive tablets of sailors                                  |             | 74.4×98.7 | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 29 | 南蛮船奉納絵馬              | Votive tablet of Westerner's ship                          | 19世紀        | 60.0×91.0 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 30 | 南蛮人行列奉納絵馬            | Votive tablet of Westerner's parade                        | 19世紀        | 62.0×93.5 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 31 | 垂米利加船人物之図            | Picture of the arrival of American ship                    | 19世紀        | 50.0×300  | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 32 | 拂郎察軍艦全図              | Picture of French ship                                     | 19世紀        | 50.0×300  | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 33 | 火輪大軍船図記              | Picture of American warship                                | 嘉永7年        | 570×20    | 1  | 神戸大学海事博物館 |
| 34 | 安政五ヶ国条約写             | Transcription of Ansei Five-Power Treaties                 |             | 25.8×18.3 | 5  | 西南学院大学博物館 |
| 35 | 万国人物図会               | Image of foreign people                                    | 19世紀        | 31.7×80.8 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 36 | 万国一覽之図附人物風俗之節        | Records of foreign customs and histories with the pictures | 19世紀        | 35.8×48.6 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 37 | ベッテルハイム訳聖書馬太伝福音書(複製) | Gospel of Matthew, J. B. Bettelheim version (Replica)      | 1855年頃      | 30.5×21.0 | 1  | 西南学院大学博物館 |
| 38 | ゴープル訳聖書摩太福音書(複製)     | Gospel of Matthew, J. Goble version (Replica)              | 1871年       | 27.0×17.0 | 1  | 西南学院大学博物館 |

西南学院大学博物館2012年度春期特別展

---

大学博物館共同企画シリーズII  
閉ざされた島 開かれた海  
—鎖国のなかの日本—

---

編 集 安高啓明

翻訳編集補助 貞清世里 高橋幸作 平川知佳 中尾祐太  
阿比留由佳 稲益あゆみ 吉松由希

翻訳協力 中松沙織

発 行 西南学院大学博物館

〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

発 行 日 2012(平成24)年6月2日

印 刷 株式会社 インテックス福岡



壺岐園



# 西南学院大学博物館

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

URL [www.seinan-gu.ac.jp/museum/](http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/)

 西南学院大学

一粒の麦から、  
次の100年に向かって

